教職課程
自己点検評価報告書

比治山大学
比治山大学短期大学部

令和７（2025）年３月

目　次

Ⅰ　全体評価
　1　教職課程認定学部・学科等一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　2　大学としての全体評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
Ⅱ　教職課程の現況
　1　大学名　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　2　所在地　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　3　教職課程を有する学部・学科等の学生数・・・・・・・・・・・・　2
Ⅲ　領域ごとの自己点検評価
　1　教育理念・教員養成の目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　2　教育課程の編成状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
　3　学修成果の把握・可視化　・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
　4　教職員組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１
　5　情報公開　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
　6　教職指導　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
　7　関係機関との連携　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４８
Ⅳ　学部ごとの評価
　1　現代文化学部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
　2　健康栄養学部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
　3　短期大学部　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５０
Ⅴ　自己評価報告書作成プロセス　・・・・・・・・・・・・・・・・・５２
Ⅵ　基礎データ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５３
Ⅶ　資料編　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５６

Ⅰ　全体評価

1　教職課程認定学部・学科等一覧

	免許状の種類	免許教科	教職課程を置く学部・学科・コース
大学	中学校教諭一種免許状	国　語	現代文化学部　言語文化学科 日本語文化コース
	高等学校教諭一種免許状	国　語	
	中学校教諭一種免許状	英　語	現代文化学部　言語文化学科 国際コミュニケーションコース
	高等学校教諭一種免許状	英　語	
	幼稚園教諭一種免許状		現代文化学部　子ども発達教育学科
	小学校教諭一種免許状		
	栄養教諭一種免許状		健康栄養学部　管理栄養学科
短期大学部	中学校教諭二種免許状	家　庭	総合生活デザイン学科
	中学校教諭二種免許状	美　術	美術科
	幼稚園教諭二種免許状		幼児教育科

2　大学としての全体評価

比治山大学・比治山大学短期大学部は、「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する」という建学の精神・理念に基づく教育を行うとともに、次代を担う教員を養成する責任を果たすために、日本だけでなく世界中の子ども、保護者、社会が強く求めているプロフェッショナルな教員の養成を目指しています。

本学においては、全学的に教職課程を実施するための組織「教職指導センター」を平成19年4月に設置するなど、教職課程管理運営委員会を中心とする運営体制をすでに整備しています。さらに、平成29年11月に示された教職課程コアカリキュラムに基づき、教職課程の見直しを進めてきました。その結果、近年、教員免許所得者や教職に就く卒業生を多数輩出するなどの成果を生んでいます。

こうした中、令和4年度に教職課程の自己点検評価を実施し、いずれの項目も適格で基準を満たしていると評価しました。また、学習指導要領の改訂に伴い、主体的・対話的で深い学びを実践できる教員の育成、GIGAスクール構想を推進できる教員の育成、時代の変化に対応し常に学び続ける教員の育成を目指して、本学の教職員がそれぞれの立場で精力的に教員の育成に取り組んでいることも、改めて確認することができました。

しかしながら取り組むべき課題もあることから、常に自己点検評価を振り返りながら地域社会に貢献できる大学を目指して努力を続けています。

比治山大学・比治山大学短期大学部
学長　　宮谷　真人

Ⅱ　教職課程の現況

1　大学名：比治山大学・比治山大学短期大学部

2　所在地：広島県広島市東区牛田新町四丁目１番１号

3　教職課程を有する学部・学科等の学生数（令和６年５月１日現在）

⑴　現代文化学部言語文化学科日本語文化コース

教職課程履修学生数	日本文化コース全学生数
66（35）人	159（90）人

＊1学年はコースに分かれていないので（　　）に示している。

⑵　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース

教職課程履修学生数	国際コース全学生数
20（35）人	138（90）人

＊1学年はコースに分かれていないので（　　）に示している。

⑶　現代文化学部子ども発達教育学科

教職課程履修学生数	子ども発達教育全学生数
228 人	236 人

⑷　健康栄養学部管理栄養学科

教職課程履修学生数	管理栄養学科全学生数
24 人	185 人

⑸　短期大学部幼児教育科

教職課程履修学生数	幼児教育科全学生数
118 人	118 人

⑹　短期大学部総合生活デザイン学科

教職課程履修学生数	総合生活全学生数
10 人	85 人

⑺　短期大学部美術科

教職課程履修学生数	美術科全学生数
16 人	121 人

Ⅲ　領域ごとの自己点検評価

1　教育理念・教員養成の目標

⑴　教育理念・教員養成の目標

【現況】

教育理念・教員養成の目標は、本学のホームページに、次のとおり公開している。

比治山大学・比治山大学短期大学部は、「悠久不滅の生命の理想に向かって精進する」という建学の精神・理念に基づく教育を行っている。この精神・理念は、人間の生命の尊厳性と永遠性を基底として、現在を生きる人間の生命が久遠の過去から連綿と現在に至っていることに感謝し、これを未来永劫に向上発展させるべく、現在を精一杯生きるように精進するということである。

このような精神・理念に基づき、本学は、現代社会において人類の普遍的な営みである文化の継承・創造・発展を日々の生活の中で実践できる豊かな人間性と幅広い教養を持つ人材を育成し、地域社会の発展に貢献することを目的として、昭和 41 年に比治山女子短期大学を開学し、平成 6 年には比治山大学（四年制女子大学）を開学した。その後、平成 10 年に大学院（修士課程）を設置するとともに、男女共同参画社会の実現に貢献できる人材育成を目的として学部、短期大学部ともに共学化した。さらに、平成 25 年に子ども発達教育専攻科、平成 26 年には健康栄養学部管理栄養学科を設けた。

本学は、上述の建学の精神・理念及び大学の目的を踏まえて、学校教育の場において地域社会に貢献できる人材を養成するために教職課程を設置している。本学の教員養成の理念・目標は、以下の考え方に基づき、日本だけでなく、世界中の子ども、保護者、社会が強く求めているプロフェッショナルな教員の養成を目指している。

① 使命感を持った人間性豊かでプロフェッショナルな教員の養成

子どもたち一人一人が、それぞれの夢や目標の実現に向けて自らの人生を切り拓くことができるように、その子どもたちを育成するという、確固たる使命感と信念を持つことのできるプロフェッショナルな教員の養成を行う。

② 専門性と実践的指導力に優れたプロフェッショナルな教員の養成

教師の仕事は将来、子どもが社会で生きていく「学力・豊かな心・体力」を身に付けるのを専門的に導くことである。どの年齢段階の子どもに、何を、どのように教育していくのが自分の使命と仕事であるかという、専門知識を備えた教えの専門家としての能力と共に具体的な実践的指導力を身に付けることのできるプロフェッショナルな教員の養成を行う。

③ 日々学び続けるプロフェッショナルな教員の養成

日々根気強く学び続け、これまで教員不易とされてきた資質能力に加え、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められている力を生涯にわたって高めていくことのできるプロフェッショナルな教員の養成を行う。

【長所・特色】

本学の教職課程は開放制の課程である。短期大学部幼児教育科は付属幼稚園を設置し、幼稚園教諭の育成に貢献してきた。また、時代の要請に応え、平成 19 年 4 月に教職指導

センターを設置し、平成 21 年 4 月に子ども発達教育学科を設置してから、教職を目指す学生数が格段に増加している。そのために、教職課程の歴史は比較的浅く、この数年で教員採用試験に合格する学生が増えてきた。

【課題】

教員採用試験に合格し、教員としての人生をスタートする学生が増えてきたことは好ましいことである。しかし、開放制の課程であることから教員免許状の取得が卒業要件ではないので、途中で挫折する学生がいる。

【資料：3-1-①②】

⑵　教員養成に係る組織

【現況】

平成 27 年 4 月に「教職課程管理運営委員会規程」を整備し、本学の教員養成に係る企画・運営・実施等の組織を、次のとおりとした。

①　教職課程管理運営委員会

学長の下に、副学長、各学部長、短大部長、研究科長、専攻科長、教職指導センター長、事務局長からなる委員会で、教職に関する企画・運営・管理・人事・予算・教育全般と教職課程戦略の策定を行う。

②　教職指導センター

センター長、副センター長、客員センター教員 2 名（非常勤、校長経験者）、事務職員からなる組織で、教職指導の実施計画の作成・運営を行う。

教職指導センター

③　教職指導センター会議

センター長、副センター長、学科センター教員、客員センター教員、学生支援課長、事務職員からなる組織で、「教職課程研究調査・管理部会」、「外部活動調査・運営部会」、「学校支援ボランティア・教員採用試験・教職指導部会」の 3 つの小部会からなる組織である。

④　学部教職課程管理運営会議

担当副学長、担当学部長、担当学科主任、センター長、副センター長、学生支援課長等からなる組織で、カリキュラム作成検討、自己評価に関する審議等を行う。

【長所・特色】

平成 19 年 4 月に教職指導センターを設置し、各学部等との連携を取りながら、教職課

程管理運営委員会が中心となって、免許状の取得や教員採用試験への支援を充実させてきた。その結果、徐々に成果が上がっていると考えている。

【課題】

新しい学習指導要領が施行され、学校現場では主体的・対話的で深い学びの授業実践が進展している。引き続き、教員養成を担っている本学の教職員が、学校現場で実践されている新しい授業実践への知識・理解を深めていくことが求められる。

【資料：3-1-②】

⑶　目標を達成するための計画

【現況】

教師になる夢をもった学生が、必要とされる資質や能力を身に付けた教師になれるように、１年次から、どのような授業を履修し、どのように学びを進めることが必要か、教職課程を履修する学生に理解させるためのテキスト「学びのガイドブック」を作成している。このガイドブックは、１年次の「教職入門」のテキストとしても活用し、履修カルテとともに卒業するまで活用している。

さらに、本学の教員養成に係る目標を達成するための計画として、本学のホームページに各学科（認定課程）ごとに、各セメスターにおいて修得すべき到達目標を次のとおり公開し、それぞれの授業において個々の学生が意識的に取り組める工夫をしている。

例　＜言語文化学科＞（認定課程：中学校教諭一種免許状国語）

履修年次		到　達　目　標
年次	時期	
1年次	前期	・日本語学の諸分野に関する基本的な事柄について理解することができる。 ・文学的表現を味わい、文学作品を自分で鑑賞することができる。 ・日本文学に関する事項について自ら興味を持ち、作品に対する自分の見解を導き出すことができる。 ・教職についての関心を高めるとともに、教職という職業選択についての理解を深めている。
	後期	・日本語の音韻音声、文字表記、文法、語彙について理解し、知識を身に付けている。 ・古典及び近代以降の日本文学について、基本的な知識を身に付けている。 ・伝達文、説明文、意見文の作成に関する、基本的な知識と技能を修得している。 ・教育の理念、歴史、思想などについて基礎的な理解ができる。

また、年度初めの教職指導センター会議において、その年度の教職指導計画を策定し、周知している。

【長所・特色】

本学の特徴としては、教職に関する企画・運営・管理・人事・予算・教育全般と教職課程戦略の策定は教職課程管理運営委員会が行い、具体的な計画・実践は教職指導センター会議が担っている。この会議において、毎年度初めに事業計画を策定している。

【課題】

教職指導センター会議に参加する教職員は、高い使命感を持って学生の指導に当たっているが、その他にも多くの教職員が教職課程に携わっていることから、教職員間の意識の統一に引き続き努める必要がある。

【資料：3-1-①②③④】

⑷　DP・CP・AP の策定状況

【現況】

本学の入学者選抜要項に、DP（ディプロマ・ポリシー）、CP（カリキュラム・ポリシー）、AP（アドミッション・ポリシー）が明示してある。その中から、教職課程に係る一部を抜粋する。

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コース（中一国語・高一国語）

DP：地域社会、教育界をはじめ現代日本における諸課題について、その本質を追求する視点と姿勢を持ち、豊かな発想力をもって解決策を見出す力と態度を身に付けている。

CP：中学校・高等学校教諭一種免許状（国語）取得を促すとともに、本学教職指導センターとの密な連携によって、教職希望者のためにきめ細かい指導を行う。

AP：国際社会、地域社会、教育界などの現代社会に対して、自らの具体的な目的意識を持っている人を求めている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース（中一英語・高一英語）

DP：異文化に関する実践的な素養と実践力をもとに、国際社会、地域社会、教育界への高い関心を有して活躍できる力と態度を身に付けている。

CP：中学校・高等学校教諭一種免許状（英語）取得を促すとともに、本学教職指導センターとの密な連携によって、教職希望者のためにきめ細かい指導を行う。

AP：国際社会、地域社会、教育界などの現代社会に対して、自らの具体的な目的意識を持っている人を求めている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科（幼一・小一）

DP：子どもの健全な発達を支援するにふさわしい豊かなコミュニケーション力と想像力・表現力を身に付けている。

子どもの発達を把握し、学習指導や各種の支援を行うために必要な専門的知識と技能を習得し、子どもの表現力、思考力、判断力を育成できる実践力を身に付けている。

学校、幼稚園、保育所をはじめ広く地域社会において、子育てや教育など次世代の育成支援に積極的に寄与しようとする態度を身に付けている。

CP：共通教育科目では主として共生、基本科目、教育学・心理学系科目では主として子どもの発達や教育・保育に関する基礎的能力を高めることを目標とした科目を構成している。

専門教育科目としての教育学・心理学系科目、保育・幼児教育系科目、教科教育系科目を通し、子どもの発達に関する専門的知識・技能を身に付けることを目標とした科目を構成している。

学校、幼稚園、保育所など地域社会で次世代の教育支援に寄与できる力量と意欲・態度を身に付けるために、教職希望者には本学教職指導センターと連携した指導とともに、公務員（保育士）希望者への指導を行う。

AP：現代社会における子どもの育成・教育に強い関心があり、次世代の教育支援に対して具体的な目的意識を持っている人を求めている。

④　健康栄養学部管理栄養学科（栄養一）

DP：食と健康分野で社会の福祉及び教育の発展などに貢献しようとする意欲を持ち、生涯にわたって学びを継続する意欲と態度を身に付けている。

CP：管理栄養士・栄養士資格取得のためには健康栄養学部管理栄養士指導センター、さらに、栄養教諭一種免許状取得希望者のために、本学教職指導センターとの密な連携によって指導を行う。

AP：科学的視点を持ち、食・栄養と健康について興味と関心を持ち、知識を得ようと学び続ける意欲のある人を求めている。

⑤　短期大学部幼児教育科（幼二）

DP：子どもの最善の利益を尊重し、保育に携わるうえで欠かせない多様な状況における思考力と判断力及び豊かなコミュニケーション力を身に付けている。

子どもの心身の健康、発達、保育の本質や保育者の役割などに関する基礎的、基本的な知識と技能を身に付けている。

保育者としての専門性を深め、生活に即した保育を構想することを通して、自己実現の喜びを持つとともに社会に貢献しようとする態度を身に付けている。

CP：短期大学部付属幼稚園との連携による実践指導等を含み、多様な保育現場で活躍するための思考力・判断力・表現力を培う。

AP：保育を学ぶ意欲を持ち、保育者を強く志し、本学で学ぶことに魅力を感じる人を求めている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科（中二家庭）

DP：生活にかかわる分野において社会に寄与できる人材として自立するための確かな専門的知識・技能及び実践力を身に付けている。

CP：さまざまな検定や資格の取得を通して職業人としての力量を高め、絶えず向上していくキャリア意識を進化させるなかで、社会に貢献できる態度と意欲を培うカリキュラムを編成している。

中学校教諭二種免許状（家庭）取得希望者のために、本学教職指導センターとの密な連携によってきめ細かい指導を行う。

AP：将来、職業人として主体性を持ち、地域社会、教育界など現代社会に対して協働

していこうという目的意識を持ち、またさまざまな検定や資格取得に挑戦し、絶えず向上しようとする人を求めている。

⑦　短期大学部美術科（中二美術）

DP：芸術活動や制作活動の中で常に向上心を持ち、集中力や持続力を保つ中で専門性を磨き、表現者・職業人として地域社会や教育界に貢献できる力と態度を身に付けている。

CP：美術の各領域の学修を活かして社会人として円滑にスタートできるように、個性を活かし、実技・演習を重視した指導を行う。
また、中学校教諭二種免許状（美術）取得希望者のために、本学教職指導センターとの密な連携によってきめ細かい指導を行う。

AP：本学科の教育を受けることによって自らを表現者・職業人として最大限成長させようとする人を求めている。

【長所・特色】

本学の教職課程は開放制であることにより、教職課程のみを意識した DP・CP・AP にはなっていないが、四年制の学部においては教職課程の履修を意識した項目を設けている。

【課題】

健康栄養学部は管理栄養士国家試験受験資格の取得を第一の目標としており、教職を目指すことが主とはなりにくい。

短期大学部においては、専攻した学科での専門的知識・技能を身に付けることが中心で、教職課程の履修を中心とした DP・CP・AP を設定することには工夫が必要である。

【資料：3-1-⑤】

2　教育課程の編成状況

⑴　教職課程を通じた授業科目の共通開設などの教育課程の編成状況

【現況】

教職課程コアカリキュラムに示してある「教育の基礎的理解に関する科目」、「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」、「教育実践に関する科目」の領域では共通開設することで、各学部学科の強みを生かした教育課程を編成している。また、教職指導センターには、元教育委員会職員や退職校長等の専門的知識を有するスタッフを配置し、教職課程を履修するすべての学生の支援・指導に当たっている。

【長所・特色】

各教科の指導については各学科が責任をもって行い、教職専門科目については子ども発達教育学科と教職指導センターが中心となって実施している。

【課題】

授業科目の内容は、各担当が責任を持って実施している。各校種の学習指導要領に則るとともに、各校種の発達段階に応じ、学校現場で求められている適切な内容になっているか意識を持って取組む必要がある。

【資料：3-2-①】

⑵　教職課程の授業科目に必要な施設・設備の整備状況

【現況】

小学校教諭一種免許状取得で必要な実技教科（家庭科・美術科・保健体育科・音楽科）、および中学校教諭二種免許状（美術科・家庭科）の実習のための施設・設備は、専門学科を開設していることから充実している。

6 号館 06114 教室【模擬授業実習室】

【長所・特色】

各教科の指導法及び教育実習指導等で、教職課程を履修している全ての学生が、主体的・対話的で深い学びを実践するための模擬授業を実習している。

【課題】

学校現場の状況を踏まえ、児童生徒が一人一台のタブレット等を活用した授業展開を想

定した授業実習ができる設備の一層の充実が望まれる。
【資料：3-2-②】

⑶　教育課程の体系性
【現況】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教科に関する専門的事項については 16 単位(高一種免のみは 12 単位)、教科の指導法に関しては 8 単位の取得を義務づけている。専門的事項については日本語学・日本文学・日本語表現の基礎に関する科目が必修となっており、教職に就いて後の自己研鑽の素地を作ることを狙いとしている。国語科教育法では折にふれて専門科目の履修内容を確認し、科目の関連づけを図っている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、法令及び教員養成の目的及び当該目標を達成するための計画と対応し、必要な授業科目が開設され適切な役割分担が図られている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては，小学校教諭一種免許状、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格の取得ができる。子ども発達教育学科のカリキュラムは、「子ども発達教育学」の学修を目的とした授業群を中心に、小学校教育について体系的に学ぶ授業群および保育・幼児教育について体系的に学ぶ授業群の三つの軸で構成されている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、「栄養教諭一種免許状」を取得することを目的に、法令及び教員養成の目的及び当該目標を達成するための計画と対応し、「栄養に係る教育に関する科目」4 単位、「教育実践に係る科目」4 単位が開設されて適切な役割分担が図られている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、カリキュラム・ポリシーに沿って、共通教育と専門教育による教育課程を体系的に編成している。具体的には、幼稚園教諭二種免許及び保育士資格の取得のため、専門教育においては、「保育の本質・目的の理解」「保育の対象の理解」「保育の内容・方法の理解」「保育の実践と研究」の 4 領域を設定し、それぞれに科目を配置してナンバリングするとともに、その体系性を示すカリキュラムマップを作成している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、法令及び教員養成の目的及び当該目標を達成するための計画と対応し、必要な授業科目が開設され適切な役割分担が図られている。

⑦　短期大学部美術科においては、「中学校教諭二種免許状（美術)」を取得することを目的に、「教科及び教科の指導法に関する科目」の「教科に関する専門的事項」として、絵画では「絵画・マンガ」「日本画Ⅰ」「洋画Ⅰ」、彫刻では「立体」、デザインでは「デザイン・映像」「マンガ・キャラクターⅠ」「映像・アニメーションⅠ」「グラフィックデザインⅠ」「工芸デザインⅠ」「CG 演習Ⅰ」「CG 演習Ⅱ」、工芸では「工芸」、美術理論・美術史では「美術史Ⅰ」「美術史Ⅱ」「色彩学」、各教科の指導法では「美術科教育法」を開講している。

【長所・特色】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、前項で示したように、該当教員の研究領域にもとづき、国語科の教科専門の内容を網羅的に履修できるよう、教育課程の編成を図っている。加えて、教職課程履修者については授業実践を見通して、より深い専門分野の理解を図るために、専門基礎科目のクラス分けに配慮している。専門基礎科目の履修状況と国語科教育法等の達成状況を勘案することが、教職希望者個々の進路の検討にもなっている。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、外国語科（英語）コアカリキュラムに基づいて教科及び教科の指導法に関する科目を設定しており、教員養成の目的及び当該目標を達成するため、実践的な学修を通して教員育成を図っている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校教育および保育・幼児教育について、1 年次はそれぞれの学問分野の基礎理論を習得し、学年進行に合わせて、実践的な内容の授業を配列している。また、1 年次から 4 年次にかけて、教育実習以外に「学校支援ボランティア」を配置することにより、理論と実践の往還が可能になるよう配慮している。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、カリキュラムマップにおいて教職に関する科目は専門発展分野に示している。学生は栄養士免許証取得や管理栄養士国家試験受験資格取得のための導入分野、専門基礎分野、専門分野と重ね合わせながら計画的に履修を進めることができるようになっている。R6 年度入学生からは、専門発展分野から外れたが、管理栄養士国家試験受験資格取得のための専門教育科目と重ね合わせながら計画的に履修を進めることができるようになっている。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、「保育技術や知識の修得、感性・創造性・表現力の育成、カウンセリングマインドの習熟、保育観、人間観を確立することを目標にして、優れた保育技術を備え、人として尊敬される人材を育成する」ことをミッションとしている。ミッションを達成するために、各領域に専任教員を配置し、会議を定期的に行うことによる共通理解を図っている。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、生活学の視点を基盤に教員養成の専門科目を授業科目としており、教員養成の目的及び当該目標を達成するための計画と対応し、実践的・体験的な学修を通して教員育成を図っている。

⑦ 短期大学部美術科においては、日本画、洋画、工芸デザイン（陶芸・染織・金工）、グラフィックデザイン、映像・アニメーション、マンガ・キャラクターの 6 コースがあり、それらすべての分野を横断した幅広い学びを開講している。

【課題】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、前項の取り組みにより教職に対する意識の高まりと学修意欲の向上という点で成果が見られる一方で、卒業に至るまでに、教壇に立つに十分な専門的教養が身につくかどうかの検討が必要である。教職をめざす意識の継続とともに、必要に応じて進路の変更を提案しなければならない場合

もあることから、キャリア教育と関連づけながら指導を進めたい。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、外国語科（英語）コアカリキュラムに基づいて教科及び教科の指導法に関する科目を設定しているが、授業担当者によっては外国語科の教員養成という意識が薄いことが課題である。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校教育と保育・幼児教育について、同時に学修できることが強みである。しかしながら、セメスターごとの履修科目数に制限をかけるキャップ制との関係もあり、カリキュラム上、両者を十分に学修する機会の確保が困難であり、その改善が望まれる。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、栄養学の視点を基盤に体系が整えられているものの、専任の教員の中に栄養教諭免許の有資格者、または教育現場で栄養教諭の勤務経験を有する教員の配置がないことが課題である。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、学科の教育課程の体系性は十分に確保されていると言える。しかし、非常勤講師におけるミッションの理解や連携が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては生活学の視点を基盤に教員養成の専門科目を授業科目としているが、授業担当者によっては中学校家庭科の教員養成という意識が薄いことが課題である。

⑦ 短期大学部美術科においては、デザインにおいて、家具や建築デザインといったプロダクトデザイン分野は未開講であり、美術における学びを全て補完することはできない。

【資料：3-2-①】

⑷ 各科目を横断する重要な事項についての教育課程の体系性

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、必要に応じて ICT を用いた授業を各科目で行い、演習の発表等を通じて活用方法の習熟を図っている。また、専門基礎科目で教職希望者を集めたクラスを編成し、教科書の教材を掘り下げるなどして国語科教育を中心とする緩やかなコアカリキュラムを組織し、専門科目と教職科目の関連を図っている。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、ICT の活用指導力など、各科目を横断する事項について、到達目標や学修量が適切な水準となっている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、各授業で Google for Education の各アプリを活用するなどして、各科目を横断する事項について、到達目標や学修量が適切な水準となっている。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、ICT の活用指導力など、各科目を横断する事項について、到達目標や学修量が適切な水準となっている。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、保育内容に関する事項について、各領域の基礎及び指導法の到達目標や内容、使用教科書などの共通化を図っている。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、ICT の活用指導力など、各科目を横断する事項について、到達目標や学修量が適切な水準となっている。

⑦　短期大学部美術科においては、教科及び教科の指導法に関する科目では、基本的スキルの修得を最低条件としており、課題を理解し、観察し、工夫し、意図的に表現できる事を到達目標としている。自学自習時間を 30～60 時間とし、それに合わせて毎授業時に課題を出している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、前項で述べたように、基礎的な演習科目と教科書教材の関連を図ることにより、授業づくりの基礎的な能力の涵養とともに、現在の学びから将来の学びの展望を持たせることをめざしている。現在の学修が、将来の職業に役立つことを実感している学生の存在は、教職希望者以外の学生にもよい影響を与えると考えられ、キャリア形成のロールモデルとして位置づけることが可能である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、英語科に関する指導法と専門的事項の学びを深化させるよう、外部検定試験における到達目標を設定したり、オンライン教材を使用し語学学習を行ったりするなどし、学修量を担保している。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、「教科授業研究 ABC」等の授業で模擬授業をする際に ICT を必ず活用するよう指導するなど、授業づくりにおける ICT 活用を推進し、教職課程履修者の ICT スキルの向上に努めている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、ICT の活用指導力に関する科目が設定されており、教員として身に付けることが必要な基礎的な指導法が身に付いている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、表現力の育成について、1 年次前後期の「音楽ベーシックⅠ・Ⅱ」及び 2 年次前後期の「保育内容（総合表現）Ⅰ・Ⅱ」を軸として構成している。また、各領域の基礎及び指導法の科目は、ほぼすべての科目を専任教員が担当している。唯一の例外である「領域環境の指導法」はオムニバスの授業であり、専任教員が最も多くの授業回を担当している。

　さらに、カウンセリングマインドの育成について、1 年次前期から 2 年次後期まで継続的に学習できるよう、科目を配置している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、生活学の専門科目として質の高い学びがされており、細分化・深化された学びを図っている。教職科目であり専門科目の中で学びの可視化のために専門科目に関係する検定試験で到達目標や学修量が担保されている。

⑦　短期大学部美術科においては、美術科の特性上、ICT を活用した授業は多く開講されており、Word や Excel といった Office ソフトはもちろん、Photoshop や Illustrator といったクリエイティブデザインソフトを始めとした様々な ICT 活用授業を展開している。また、単にソフトの基本操作修得だけでなく、ネットワークを活用しながら制作に取り組む課題を通して、広く ICT スキルの向上を図っている。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職に就くことを見通した専門基礎科目を設ける等の取り組みを進めているが、教職課程の継続を検討すべき者へ

の指導が課題である。個に応じた指導の充実を図るとともに、個々の学生の学修到達度や興味の方向を振り返らせ、適切なキャリア形成について考えさせていく必要がある。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、英語科に関する指導法と専門的事項の学びを深化させるよう、外部検定試験における到達目標を設定したり、オンライン教材を使用し語学学習を行ったりするなどしているが、英語科を指導するための示唆が少ない教科に関する科目がある。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、前述のように、ICT を活用した授業づくりを推進しているものの、授業時間以外で学生が自主的に授業練習する設備の、さらなる充実が必要である。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、ICT の活用指導に関して、授業で有効に活用できる教材（コンテンツ、アプリ）の充実など、更なる環境整備を期待する。また、教育現場の実態に合わせ、学習場面に応じた情報通信技術を効果的に活用した指導事例を示しながら指導する必要がある。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、各科目における学修の質や量の水準設定が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、専門科目として細分化・深化された学びが展開されているが、学生が中学校家庭科を指導するための示唆が少ない教科に関する科目がある。そのため教育実習の指導において、指導過程で具体的な授業構成が不十分な面がある。

⑦ 短期大学部美術科では、1 年次前期終わりに 6 コースの中から専攻を選び、残り 1 年半をコース専門で学びを深めるカリキュラムとなっている。コースによっては一切 ICT を使わない分野もあるため、専攻したコースによって 2 年間で身に付く ICT スキルに差が生じる。（※共通科目で ICT 系科目は開講している）

【資料：3-2-③】

⑸ キャップ制の設定状況

【現況】

学生がゆとりを持って学修に専念できるように、単位履修のための履修登録の制限については、学生便覧（P32 他）に次のとおり示してある。

① 履修登録できる単位数は、各学期 24 単位を上限とします。

② 他大学との単位互換科目については、履修登録の上限を超えて履修できます。（R6 年度入学の健康栄養学部の学生は、認定された単位が卒業要件単位になりません。）

③ 現代文化学部の卒業論文の履修登録は、原則として、3 年以上在学し、卒業に必要な 80 単位以上習得していなければなりません。

④ 健康栄養学部の地域課題研究 I の履修登録は、3 年次前期までの必修科目をすべて履修していなければなりません。

【長所・特色】

キャップ制の設定により、充実した学修ができる環境にあると考える。

【課題】

教職課程を履修している短期大学部の学生にとっては、負担は大きくなる。

【資料：3-2-①】

⑹　教育課程の充実・見直しの状況

【現況】

平成 29 年 11 月 17 日に教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討委員会によって示された「教職課程コアカリキュラム」に則り、平成 30 年度に教育課程の検討を行い、学生便覧にあるとおり、平成 31 年度から現在の教職課程に移行した。

【長所・特色】

教職課程を履修する学生に対して、教職課程コアカリキュラムや教育委員会が教員に求める資質の向上に関する内容等も踏まえた「学びのガイドブック」を作成し、「履修カルテ」とともに、教職課程の履修を始めた段階から卒業までの見通しを持たせる指導を行っている。

【課題】

移行後の教職課程の成果・課題を検討する時期となっている。

【資料：3-2-①】

⑺　シラバスの作成状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、授業能力の育成を目標として関連科目の充実・評価の明確化を図っている。また、教職関連科目については、学生の実態を勘案して、到達目標、評価方法、授業計画、事前学修と事後学修の方法等を検討し、シラバスに明記している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、シラバスに、教員養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容が明確に記載されている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、教学委員会が示す「シラバス作成の手引き」に従い、授業概要、DP（ディプロマ・ポリシー）との関連、到達目標、評価方法、授業計画等を示している。また、教職課程コアカリキュラムに該当する科目については、求められる内容を過不足なく含めてシラバス作成を行っている。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、教員養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容が、シラバスに明確に記載されている。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、各科目のシラバスにおいて、DP（ディプロマ・ポリシー）との関連を明らかにするとともに、到達目標や内容、成績評価基準を明確に示し、事前学修と事後学修の時間数を示している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教員養成の目標及び当該目標を達成するための計画と授業科目との関係、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容が明確に記載されている。

⑦　短期大学部美術科においては、「１.中学校学習指導要領における美術科の目標・内容に関する理解、２.美術科の指導内容・指導方法・評価に関する理解、３.美術科の実践的指導力の習得」を目標に、そのための内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容をシラバスに記載しており、専門教育科目のいずれも、教職課程コアカリキュラムに則って適切に記載されている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、国語科教育法で行っている形成的評価をコース会議等で報告し、到達の状況を共通理解することで、以降のシラバスの調整・作成に役立てている。また、個々の教職課程履修者の他の科目の履修状況や教職への意欲等について連絡を図ることで、今後のシラバスの作成に資することができている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、各期の授業ガイダンスの際に、シラバスに示された目的、達成目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修について学生に説明している。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、教職課程のシラバスは、授業担当者が作成後、教職指導センター委員のチェックを受けることとなっており、必要に応じて、適宜、修正を依頼している。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、各期の授業ガイダンスの際に、シラバスに示された目的、達成目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修について学生に説明している。栄養教育実習で必要となる事例検討や模擬授業は、授業ごとに実施する授業アンケートの結果を受け、毎年複数の教員でチェックし見直しや改善が必要であれば適切に行っている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、シラバスは、必要事項の記入、正確な情報の記載などについて学期ごとに点検され、修正の必要があれば各教員に修正を依頼する。また、教職指導センターの担当部門において、教職課程に掛かるすべての授業科目のシラバスがチェックされている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、各期の授業ガイダンスの際に、授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容が明確に記載されており、教職に関する科目について理解を図っている。また教科及び教科の指導法に関する科目の中で、個々の学生の学修について指導している。

⑦　短期大学部美術科においては、中学校美術の学習指導要領に示された内容を踏まえ，美術科の目標・内容・方法・評価等について理解するとともに、授業実践で必要となる知識と方法について広く学ぶため、事例検討や模擬授業等を実施し、美術科の目標・内容・方法・評価等に関する適正な理解を深め実践的指導力の習得を目指している。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職課程履修者一人一人の

到達状況や事情に応じた指導を進めているが、一方で、専門科目の独自性は尊重されねばならないと考えている。教職課程履修者に配慮しつつも、より専門的な学習を求める学生の要求に応えていく指導体制の工夫が必要である。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職課程履修者一人一人の実態に応じた指導を進めているが、教科に関する専門的事項と各教科の指導法を効果的に関連させたシラバスの作成が課題である。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、個々のシラバスについてのチェック体制は整っており、授業の質の担保に寄与していると考えられるが、それぞれの授業の系統性について担当教員間で議論し、カリキュラム全体の質の向上に努める必要がある。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、シラバスの作成及び複数教員によるチェック体制についても体系化している。しかし、授業改善の際に授業評価アンケートの結果を反映させるには教職課程履修者が少なく、課題の理解・把握が個々の評価に偏らないように統計的に検討するのは難しい。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、相互に関連する科目の担当教員が、それぞれのシラバスを検討して、内容の共通化や差別化を図る体制づくりが課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、各期の授業ガイダンスの際に、教職に関する科目も含め、各授業科目の目的と到達目標、内容と方法、計画、成績評価基準、事前学修と事後学修の内容を明確にし、教職に関する科目について理解を図り、教科及び教科の指導法に関する科目の中で個々の学生の学修について指導しているが、学生への認知や理解が十分図れていない。

⑦ 短期大学部美術科においては、授業時間が四年制大学に比べて少なく、詰め込み式の授業内容となりがちであり工夫が必要である。

【資料：3-2-③】

⑻ アクティブ・ラーニングや ICT の活用など、新たな手法の導入状況

【現況】

本学は「比治山型アクティブ・ラーニング」と称し、一方的な知識伝達ではなく、学生の学ぶ意欲を引き出すため、体験や参加によって学生が主体的・能動的に考えるきっかけを作る授業展開を推進している。

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、小グループによる学修や演習形式の授業の実施に心がけている。教職に直結する国語科教育法では、問題解決的学習を基盤とするアクティブ・ラーニングや ICT を取り入れた授業の体験と省察・分析を行うことで、これらの効果的な活用方法を含め、授業づくりの方法や授業の構造を修得することを意図している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、授業科目の達成目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングや ICT を活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、ICT の活用について、ほぼすべての授業で Google for Education を活用するとともに、教科教育法や保育指導法の授業におい

ては、デジタル教科書や電子黒板等の ICT 機器を活用した模擬授業・模擬保育の指導に力を入れている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、授業科目の達成目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングや ICT を活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、対面性は保育の本質であり、ほぼすべての科目でアクティブ・ラーニングを取り入れている。また、ICT の活用について、コロナ禍でのデジタル・コンテンツの利用が進んでいる。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、授業科目の達成目標に応じ、少人数のアクティブ・ラーニングや ICT を活用した新たな手法を導入し、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫が行われている。

⑦　短期大学部美術科においては、美術はそれ自体がアクティブ・ラーニングであるが、講義系においても、授業目標の達成に応じて、調査、グループディスカッション、模擬授業、プレゼンテーション等を導入している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、前項で述べたように国語科の授業を体験することによる授業方法、および、構造の修得をめざしている。自らの中・高時代の授業との比較から、よりよい授業のあり方に目が向くようになり、模擬授業を考える際には自然に工夫に目が向くようになってきている。ICT の活用についても、見た目の美しさではなく、使用する目的とタイミングについての検討がなされるようになっている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、ICT を使用してオンライン英会話や e-learning 教材を活用して主体的に語学学習をしたり、グループで課題解決をしたりするなど、自ら学修計画をたて行動する学びを展開している。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、先述のとおり、ほぼすべての授業で Google for Education を使用しているため、Google Classroom など学校教育でも活用できる ICT スキルを自然に身に付けられる環境が整っている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、学科全体で情報関連の検定試験への受験を推奨している。また専門教育科目においても栄養情報実習があり活用に向けての学修ができている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、幼児教育科の特色である表現力やカウンセリングマインドの育成において、盛んにアクティブ・ラーニングの手法を取り入れている。また、科目「総合演習」や表現活動ではグループワークを取り入れ、協働する力の育成に取り組んでいる。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、情報関連の検定試験への受検を推奨しており、ICT を活用した専門科目の授業科目があり、個別指導をしている。そのため考える」「話す」「行動する」などの多様な学びをもたらす工夫を多くの授業で取り組んでいる。

⑦　短期大学部美術科においては、講義受講生の美術教育に関する実態調査（美術に対す

る意識、美術教育に関する意識等)をはじめとして、題材開発・教材研究をグループディスカッションで行ったり、模擬授業を通して表現や鑑賞の指導の在り方をグループワークで取り組むなど、多様な学びをもたらす工夫を行っている。

【課題】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、ICT の活用も含め、国語科の授業を体験することによる授業方法、および、構造の修得をめざしている。意欲的な学修が実現し、達成感も高い一方で、教科の内容の修得に満足し、専門科目への思考が薄れる者も見受けられる。充実した授業には深い専門的知識と理解、思索する態度が必要であることを指導し続ける必要がある。ICT については使用目的を明確化にし、効果的な活用方法に留意させる必要がある。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、ICT を使用してオンライン英会話や e-learning 教材を活用して主体的に語学学習をしたり、グループで課題解決をしたりするなど、自ら学修計画をたて行動する学びを展開しているが、科目の中には講義に偏った授業もある。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、積極的に ICT スキルを修得できるように各授業で活用しているが、中には十分なスキルレベルに達しない学生も存在している。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、科目での学修はできているものの、積極的に活用するレベルまで到達できてない学生が一定数いる実態もある。教育現場での ICT の活用は急速に進んでおり、本学においてもさらに積極的な活用を模索する必要がある。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、専門性や関連性を考慮した科目間の連携が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、「考える」「話す」「行動する」などの多様な学びのうち、「行動する」という学びがアクティブ・ラーニングとはならず、受け身的なものとなっている。

⑦ 短期大学部美術科の学生は作品を通じてメッセージを伝えることを得意としており、逆に言えば、言葉で説明したり相手に伝えたりすることを苦手とする学生が多い。また、コースによって ICT スキルに差があることから、ICT の適切な活用を目指していく必要がある。

【資料：3-2-③】

⑼ 個々の授業科目の見直しの状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職課程履修者を集めた専門基礎科目のクラスを編成し、授業づくりの基礎的な能力の涵養を図っているが、そこで明らかになった個々の到達度を点数化して共通理解し、他の科目での指導に役立てている。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、学修の成果や

自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、セメスター毎に「授業評価アンケート」を実施し、受講学生の取り組み状況、理解度等を把握する。評価結果については、授業担当者より受講学生へコメントを返すとともに、次年度の授業改善に役立てている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、授業担当教員が栄養教諭の実務経験者と一緒に学修の成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しを行っている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、教育研究開発センターの依頼により、各学期の全ての科目について課題及び改善計画を明らかにしている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、学修の成果や自己点検・評価の結果等を踏まえて充実が図られ、適切な見直しが行われている。

⑦　短期大学部美術科では、専門教育科目においては毎年、学科の専任教員全員で、各科目についてカリキュラムの精査・見直し・改定を行っている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、前項の取り組みによって、教職課程履修者をコース全体で支え、育成しようという意識が高まっている。専門科目の取り組み状況から、教職科目の見直しをすることも多く、双方向からの改善がなされている。教職課程の立場から見て緩やかなコアカリキュラムが形成されており、効率的な学修が可能になっている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、各学期で学修の成果や自己点検・評価を行うこととしており、個々の授業科目の見直しに結び付けている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校教員養成に関わる「教科教育法」の授業では、指導内容が重複しないよう、授業担当者間で授業内容に関する調整を行っている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、栄養教諭としての基礎的な知識・技能の理解が身につくよう、各学期で学修の成果や自己点検・評価を行うこととしており、個々の授業科目の見直しに結び付けている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、実習担当教員間において、担当科目の学修内容を共有し、実習指導科目における指導内容の改善に活かしている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、学科での共通認識として授業担当者が必ず授業時に振り返りをする時間を設け、学生が学修の成果を授業ごとに自己点検・評価しており、個々の授業科目の見直しに結びつけている。

⑦　短期大学部美術科においては、履修者数や学修成果、美術分野の社会状況に合わせて、柔軟に対応している。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職課程履修者への配慮をしつつも、各科目の専門性を尊重した見直しを進めていくことが課題である。教科専門

の深い理解が将来の授業づくりに資する点を共通理解する必要がある。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、各学期で学修の成果や自己点検・評価を行うこととしているが、それらが授業の見直しにつながっているか検証する必要がある。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、前述のように、「授業評価アンケート」を実施し授業改善に取り組んでいるが、これらの取り組みが個々の教員に任されており、組織的な検証となっていない。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、各学期で学修の成果や自己点検・評価を行い、授業の見直しをしているが、それが学生の学修の成果につながっているか検証する必要がある。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、専門性や関連性を考慮した、科目の担当教員間の共通理解や連携が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、学科での共通認識として授業担当者が必ず授業時に振り返りをする時間を設け、学生が学修の成果を授業ごとに自己点検・評価することを確認しているが、あくまでも授業担当者に委ねており、見直しまで結びついていない可能性もある。

⑦ 短期大学部美術科においては、非常勤講師が担当している科目はなかなか状況や課題の理解・把握が及んでおらず、専任と非常勤講師の科目で、見直しの細やかさに差が出ている。

【資料：3-2-③】

⑽ 教職実践演習及び教育実習の実施状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、出身母校実習を原則として教育実習を実施している。所属ゼミに関わらず、コースの教員全員が教育実習指導に関わり、状況を報告し合って共通理解を図っている。なお、訪問にあたっては、教職担当から所在地・使用教科書・実習期間・事前指導内容等を示すなどして、適切な事後指導がなされるよう配慮している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職実習演習、教育実習は、事前指導と事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校実習は、3 年次後期、基本的に出身母校で 4 週間の実習を実施している。幼稚園実習は、3 年次前期に本学付属幼稚園で 2 週間、4 年次前期に学外幼稚園で 2 週間実施している。各実習期間中には、学科教員による訪問指導を実施している。

教職実践演習は、小学校教員希望学生と保育士・幼稚園教員希望学生の合同クラスで実施している。両者の共通事項として「履修カルテ」を活用した 4 年間の振り返りを行う。また、それぞれのコースに分かれ、小学校現場、保育現場の研究会に参加するなどして、専門性の向上に努めている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、栄養教育実習は、4年次に給食経営管理臨地実習Ⅱと合わせ2週間の実習を実施しており、事前指導・事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われている。また、実習期間中には、学科教員による訪問指導を実施している。

教職実践演習は、栄養教諭として学校現場の経験がある教員によって、実習経験を生かす授業を行い専門性の向上に努めている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、教職実践演習は、幼稚園教育実習担当教員と保育実習担当教員（保育所担当と施設実習担当）の計3名によって、実習経験を生かす授業を行っている。教育実習は、幼稚園長経験のある主担当教員と2名の専任教員の連携の下に適切に行われている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職実践演習、教育実習は、事前指導と事後指導を含め、大学の主体的な関与の下で適切に行われている。

⑦　短期大学部美術科においては、教育実習の意義・目的・内容を概説し、教育実習に臨むにあたり実習生としての適切な態度や研究授業の進め方、教育実習録の書き方などを指導している。また、実習後は実習経験を振り返り、省察・評価し、課題を明確にすることで更なる学びにつなげている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、実習校訪問等に教員全員が関わる等の活動を通して、コース全体で教職指導を進めている。教職課程履修者の実習後の状況や日常的な学修への取り組みについても報告し合い、教員免許取得の可能性や進路変更の必要性について検討し、共通理解に心がけているため、早い段階での適切な支援が可能である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職指導センター教員と連携し、きめ細かい教職実習演習、教育実習における事前指導と事後指導を行っている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校現場・保育現場の研究会等に参加することにより、自らの専門性をさらに向上させようとする意欲が湧くとともに、卒業後、教育・保育の専門職業人となることへの意識の向上が見られる。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程履修者が少ないため栄養教育実習に向けての事前指導と事後指導（科目名：栄養教育実習（事前指導と事後指導を含む。））は集中講義とし、開講にあたっては履修者に合わせた柔軟な対応を行っている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、幼稚園教育実習は、1年次後期（11月）から2年次前期（9月）まで3回に分けて行われ、その約10か月間に事前指導を適時適切に行っている。第1，2期は本学の付属幼稚園での実習であり、幼稚園長及び教員と連携して実施している。事前指導では、幼稚園長経験のある教育実習主担当教員のもと、指導案作成や模擬保育の指導を行っている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を履修する学生が少ないため、また教育実習の担当する授業が違うことが多く、個別の事前指導と事後指導で主体的な関与や指導としている。

⑦　短期大学部美術科においては、教職課程履修者である 1 年次生と 2 年次生が集まる教育実習報告交流会を実施している。2 年次生においては実習を振り返り今後の学びとなるよう、1 年次生においては教育実習に臨む自覚と今後の見通しを持って学んでいける機会としている。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、コース全体で教職課程履修の充実に向けた取り組みを進める一方で、教職に就く予定のない学生への指導方法が課題である。教員免許取得の意義を個々に受けとめさせ、誠実に教育に向かう姿勢が今後の生活にどのように役立つかを考えさせる指導について共通理解を図る必要がある。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、きめ細かい教職実習演習、教育実習における事前指導と事後指導を行っているが、教育実習先によって状況や実習内容が異なるため、個々の成果や課題に応じたフォローが必要である。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校教員希望学生と保育士・幼稚園教員希望学生が同時に履修するにもかかわらず、「履修カルテ」を活用する場面以外は、それぞれ別の活動を行うことが多い。保幼小連携という観点からも、両者が協働で行う教育活動を充実させることが課題である。

④　健康栄養学部管理栄養学科の栄養教育実習においては、実習先からの事前課題である、献立課題や給食指導の指導案と教材作成、模擬授業（研究授業）の指導案と教材作成に主体的に取り組み実習に出向く場合がほとんどである。実習では学校現場の実態と照らし合わせ学びを深め、事後は報告書作成や報告会を実施し今後の課題を見出す内容としている。今後は報告会に参加する者を教職課程履修中の 1～3 年生と、さらに多くの教員に参加してもらうように促す必要がある。これにより、4 年間の学びの集大成となるようにし、教職に就くことへの意識の醸成に努めたい。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、教職実践演習について、「保育・教職実践演習」として行っており、内容や学修水準の設定に課題がある。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、個別に事前指導と事後指導で主体的な関与や指導としているが、中学校から教育実習の配当が直前となり、あるいは中学校の行事の変更等でなかなか大学の主体的な関与とならずに、中学校現場に委ねている場合もある。

⑦　短期大学部美術科においては、教育実習までに必要な準備やスキルの獲得は授業で適切に行われているが、学校や指導担当者によって状況や実習内容が違うため、事前指導では現場対応力、事後指導では個々の成果に合わせたフォローが必要である。

【資料：3-2-③④】

3　学修成果の把握・可視化

⑴　成績評価に関する全学的な基準の策定・公表の状況

【現況】

成績評価と単位認定についての具体的な評価方法及び評価基準は、学生便覧（P25～27）及び各授業科目のシラバスに示してある。

基本的には①筆記試験、②実技試験、③レポート・提出作品、④授業への参加状況等を総合的に判断して行う。また、評価基準は次のとおりである。

<table>
<tr><th>成績</th><th>意　味</th><th>評点</th><th>判定</th><th>認定</th><th>GP</th></tr>
<tr><td>秀</td><td>到達目標をほぼ完全に達成しているきわめて優秀な成績</td><td>100～90</td><td rowspan="4">合格</td><td rowspan="4">認定</td><td>4.0</td></tr>
<tr><td>優</td><td>到達目標を十分に達成している優秀な成績</td><td>89～80</td><td>3.0</td></tr>
<tr><td>良</td><td>到達目標を一応達成している成績</td><td>79～70</td><td>2.0</td></tr>
<tr><td>可</td><td>不十分なところもあるが、到達目標の最低限度レベルを達成している成績</td><td>69～60</td><td>1.0</td></tr>
<tr><td>不可</td><td>到達目標を達成していない成績</td><td>59 以下</td><td rowspan="2">不合格</td><td rowspan="2">不認定</td><td rowspan="2">0.0</td></tr>
<tr><td>－</td><td>試験放棄や出席不足</td><td></td></tr>
<tr><td>N</td><td>他大学で修得した単位が認められた成績</td><td></td><td>合格</td><td>認定</td><td></td></tr>
</table>

＊　GP：Grade Point

成績の公表は、Hi!way システム（学生情報システム）で学生個人に公表し、別途保護者に修得単位通知書を送付している。

【長所・特色】

本学では、GPA(Grade Point Average)を導入しており、GPA を履修指導上の目安として活用している。また、成績優秀者の選考基準のひとつとしても活用している。

【課題】

各セメスターで成績不振者には、早期に計画的な履修の回復ができるように本人及び保護者に警告し、チューター教員による面談等を行っているが、残念ながら成績不振を理由に退学する学生がいる。また、教職課程の単位不認定を理由に教職への道を諦める学生もいる。

【資料：3-3-①②】

⑵　成績評価に関する共通理解

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、複数の教員が分担して開講している場合はシラバスに明記し、オリエンテーションにおいて具体的な内容や評価等について説明を行っている。また、担当間で調整を行い、評価の平準化に努めている。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、複数の教員が

分担して開講している場合の成績評価の平準化を図るよう努めている。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、複数の教員で開講する授業の成績評価について平準化を図るよう努めている。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、複数の教員が分担して開講している場合の成績評価の平準化を図るよう努めている。
⑤　短期大学部幼児教育科においては、各チューター教員が成績評価を担当している初年次セミナー及び総合演習について、チューター教員の代表及び副代表がその平準化のためのガイドラインを示し、平準化に努めている。
⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、複数の教員が分担して開講している場合の成績評価の平準化を図るよう努めている。
⑦　短期大学部美術科においては、複数教員が分担開講している場合でも、本学規定の成績評価基準に則り、成績評価の平準化に努めている。

【長所・特色】
①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、複数の教員が分担して開講している場合は、担当間で調整を行い、評価の平準化を図っている。個々の学生の履修状況についても連絡を取ることで、多角的な視点からの学生理解が可能になっている。
②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、複数の教員が担当して開講している場合、学生に担当授業の分野を明確にして授業を行うとともに、担当教員で成績評価について協議し、成績の平準化に努めている。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、複数の教員で開講する授業について、評価方法や評価基準について、事前に担当者間で調整し、公平な評価になるよう努めている。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、複数の教員が分担して開講している場合はシラバスに確実に明記し、さらに各授業のオリエンテーションにおいて説明を行い、担当授業の分担や分野を明確にして授業を実施している。成績評価の際は教員間で情報共有を行いながら成績の平準化に努めている。
⑤　短期大学部幼児教育科においては、各チューター教員が担当している科目において、グループワークの基礎となる資料を作成させることにより、学修成果のエビデンスを確保している。
⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、複数の教員が担当して開講している場合、学生に担当授業の分野を明確にして授業を行い、成績評価についても事前に周知して成績の平準化に努めている。
⑦　短期大学部美術科においては、授業期間中は学生の出欠状況を毎週、学科教員全員で情報共有している。また、学生の課題への取組状況などでフォローが必要な学生についても適宜共有し対応を行っている。そうする事で、複数の教員が分担開講している科目においても教員の認識共有が図られ、成績評価の平準化ができている。

【課題】
①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、複数の教員が分担して開講している授業では、担当教員間の評価を完全に平準化することは困難なため、受講生に

不公平感を抱かせないよう、評価について納得できる説明を心がける必要がある。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、複数の教員が担当して開講している場合、担当教員で成績評価について協議し成績の平準化に努めているが、担当者により授業展開が異なるため、担当別の授業における学修成果の可視化が難しい。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、先述のとおり、評価の平準化を目指して担当教員間で協議を行っているが、担当教員間で若干の評価の差が生じることは否めない。学生に不公平感を抱かせないよう、評価についてより丁寧な説明を心がける必要がある。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、教員間で授業構成や展開、評価内容は情報共有し、また評価基準も数値化しているため学修成果を把握できている現状である。しかし教員の中には専任教員でない場合があり、変動がある場合にはその都度すり合わせをする必要がある。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、学生にとってよりわかりやすい成績評価の在り方を検討することが課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、担当している教員により授業構成や授業展開に違いがあり、学修成果の把握・可視化に向けて一層取組む必要がある。

⑦ 短期大学部美術科においては、担当している教員によって授業構成が異なるため、各授業における学修成果の把握や可視化には至っておらず、検討が必要である。

【資料：3-3-③】

⑶ 教員養成の目標の達成状況を明らかにする情報の設定および達成状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学期のはじめに資格取得に必要な単位の履修状況のチェックを行っている。また、「履修カルテ」を活用し、教職に求められる資質能力がどの程度身に付いているか、セメスター毎に確認している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、卒業時の免許取得状況や教職への就職情報のほか、所在する教育委員会の策定する教員育成指標など、教員養成の目標の達成状況を明らかにするための情報が適切に設定されており、「履修カルテ」により達成状況を把握している。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、ホームページ上でセメスター毎の到達目標を公開している。この到達目標は、各セメスターに配当される教職課程科目と連動しており、それぞれの科目の単位修得状況によって達成度を判断できる。また、「履修カルテ」を活用し、教職に求められる資質能力がどの程度身に付いているか、セメスター毎に確認している。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、卒業時の免許取得状況や教職への就職状況のほか、所在する教育委員会の策定する教員育成指標など、教員養成の目標の達成状況を明らかにするための情報が適切に設定されており、それがどの程度達成されているかを「履修カルテ」等を活用し把握している。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、全学生が幼稚園教諭二種免許を取得するよう指導している。令和 4 年 3 月卒業生 96 名のうち、93 名（96.9%）が同免許を取得した。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、卒業時の免許取得状況や教職への就職状況のほか、所在する教育委員会の策定する教員育成指標など、教員育成の目標の達成状況を明らかにするための情報が適切に設定されており、それがどの程度達成されているかを「履修カルテ」等を活用し把握している。

⑦　短期大学部美術科においては、セメスター毎に、教職への理解、職業意識、知識や技術の修得についての到達目標を設定しており、「履修カルテ」等によって達成状況を把握している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、「履修カルテ」等のデータをもとに目標達成状況や教職に対する意識のありようについて共通理解を図っている。併せて、個々の学生に対する指導の方向についても検討を進めている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職指導センター教員と連携し、教員養成の目標の達成状況について「履修カルテ」等を用いて把握し、指導を行っている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、「履修カルテ」を用いて、教職に求められる資質能力の獲得状況を、セメスター毎に自己評価している。また、自己評価結果をチューター教員と共有し、今後の目標や課題を一緒に検討するように努めている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、「履修カルテ」の内容把握は、1、2 年生はチューター教員と学科センター教員、3、4 年生はゼミ担当教員と学科センター教員が年に 2 度以上行っている。内容の把握の際には教員養成の目標の達成状況なども、その都度確認している。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、学生に対して、幼稚園教諭免許と保育士資格の両方を取得するよう指導しており、令和 4 年 3 月卒業生のうち、91 名（94.8%）が両方の免許資格を取得した。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程の学生の卒業研究指導をする教員が担当し、教員育成の目標の達成状況を明らかにするための情報を適切に設定し、指導が行き届いている。

⑦　短期大学部美術科においては、1 年次前期のオリエンテーションにおいて教員免許状取得希望者に対し、学生便覧や美術科独自に作成した教職課程履修者用の教育課程表等の資料を基に、懇切丁寧な説明会を開催している。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、「履修カルテ」を活用した指導を行っているが、半年に一回の評価であるため、その場限りの振り返りになっている場合もある。実際には日々の学生の状況を観察から指導の方向が見出されることが多く、教員間の連携をより密にしていくことが必要である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職指導センター教員と連携し、教員養成の目標の達成状況について「履修カルテ」等を用いて把握

し、指導を行っているが、「履修カルテ」の項目が多く達成が難しい学生がいる。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、先述のとおり、「履修カルテ」を活用した自己評価を実施しているが、半年に一回の評価であるため、その場限りの振り返りになっている場合もある。日常的に自己を振り返る取り組みの工夫が必要である。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、学科教員が「履修カルテ」の内容の把握は行えているものの、「履修カルテ」の運用の意義や位置づけなどを理解したうえで、学生の実態と照らし合わせた目標達成状況の確認には教員間で温度差がある。今後は、学科の会議等を利用し、教員間の共通認識を得ることが課題である。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、いずれの免許資格についても、取得率が 100%に達していないことが課題である。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を履修する学生の卒業研究指導をする教員は、同時に他の専門分野の学生の卒業研究指導も重なっており、非常に負担が大きくなっている。

⑦　短期大学部美術科においては、例年、教職を希望する学生は 2 割ほどいるが、半数以上が教職希望ではなく資格取得のみを目的として履修を希望していたり、保護者に免許状取得を進学の条件として受験・入学したとする理由が多く、そうした学生は申し込んでも履修途中で辞退する確率が高いことが課題である。

【資料：3-3-④⑤】

⑷　成績評価の状況

【現況】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、各授業の達成目標及び成績評価の方法について、シラバスで明記するとともに、第 1 回目の授業において受講生に説明している。教職希望者を集めた専門基礎科目と国語科教育法Ⅰについてはレディネス調査を行って、個別の目標を設定させることで学修への意識を高めている。その上で、シラバスを詳しくした学修計画・評価基準・評価方法・評価対象を示し、15 回の授業の折々に形成的評価を行う一方で、希望者には補習を行うなどの指導を進めている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、達成水準や評価方法等はシラバス等を用いて、最初の授業で説明をしている。学生は、自己の成績について疑義がある場合、申し出ることができ、担当教員は説明をすることになっている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、各授業の達成目標及び成績評価の方法について、シラバスで明記するとともに、第 1 回目の授業において受講生に説明している。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、成績評価の評価方法についてはシラバスに明記している。また、各授業のオリエンテーションではシラバスを示しながら口頭でも説明を行い、定量的又は定性的に達成水準を明らかにしている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、シラバスに成績評価の方法を明記している。学生

は、自己の成績について疑義がある場合、申し出ることができ、担当教員は説明をすることになっている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、シラバスに成績評価の方法を明記している。各授業のオリエンテーション時に学科独自の「ガイダンスの記録」を使い、担当教員が説明し、学生は説明内容等をまとめる。その際に、授業での「到達目標」を成績評価基準とした達成度評価を明確に説明しており、学生からの疑義がある場合は、担当教員は、成績評価の根拠を示し説明をすることになっている。

⑦　短期大学部美術科においては、授業ごとに到達目標を設定しており、その評価方法の詳細はシラバスに明記している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学修計画・評価基準・評価方法・評価対象を明らかにし、形成的評価を行うことで学修の意識を高めることを意図している。その結果、学修に真剣に取り組む姿が見られ、提出物等が遅れることもほとんど見受けられない。また、形成的評価を点数化することで、コース内の他の教員にも理解が求めやすく、協力して教員養成に向かう体勢を作ることができる。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、各学期のガイダンスで達成水準を示し、授業外学修も提示することで質と量を担保している。また、外部検定試験を計画的に実施し、英語力の継続的な変化を学生が客観的に把握できるようにしている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、授業の特質に応じて、期末試験に加え小テストや課題レポート、作品制作や音楽実践、グループワーク等への参加状況など、多様な観点から評価するよう努めている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、学修計画・評価基準・評価方法・評価対象を明らかにすることで学修の意欲を高めることができている。学修に真摯に取り組み、事前学修と事後学修で課題を計画的に進めることができている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、評価ツールとして、主に知識の獲得度合を測る定期試験に加えて、授業中に作成するワークシートや成果物、授業中に行うグループワークや模擬保育、作品制作や歌唱実践など、幼稚園教員に求められる多様な能力を測定している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、学期初めのガイダンス等で達成水準を明らかにし、日々の予習・復習も明確に示して定量化又は定性化しており、また、各科目に関係する検定試験に挑戦することで自分の学修の成長が実感として把握できる。

⑦　短期大学部美術科においては、美術科教育法においては、その他（60%）、参加状況（30%）、記録（10%）を総合して評価している。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学習への取り組みを促すために、学修計画、評価基準、評価方法、評価対象を明らかにし、点数化による形成的評価を行った場合、学習意欲の向上が見られる反面、点数化されることへの重圧を必要以上に感じる者も見受けられる。教職に就くために身につけるべき力と評価の関連を明確

にするとともに、評価の目的を明らかにしていく必要がある。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、各学期のガイダンスで達成水準や授業外学修を提示したり、外部検定試験を計画的に実施し、英語力の継続的な変化を学生が客観的に把握できるようにしているが、個々の学生で取り組みに差がある。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、教員免許状の質の保証という観点から、成績評価については厳密に対応している。そのため、それぞれの授業の達成水準に到達できない学生も存在する。そのような学生の学習意欲を維持し、教員免許状取得に向けた支援を継続することが課題である。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、管理栄養士国家試験受験資格の取得を第一目標にしているため、学生の教職科目の履修に対しての学ぶ意欲の維持については課題である。栄養士免許証取得、管理栄養士国家試験受験資格取得、栄養教諭一種免許状取得のための必須科目は数多くあり、達成水準に到達するために努力はしているが困難な場合も出ている。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、授業への参加状況やグループワークにおける活動状況など、その場で評価するツールを利用する際の公正・公平さの確保が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、日々の学修の姿勢を成績評価に加えるためには、学生の学ぶ意欲をどう持続するかが課題である。また学生により学修意欲に落差が大きいことも課題である。

⑦ 短期大学部美術科においては、資格取得を目標としている学生と教員になることを目標としている学生とで取組状況に差がある。

【資料：3-3-⑥】

4　教職員組織

(1) 教員の配置状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科においては、14 名の教科専門科目担当教員と 2 名の教職専門科目担当教員が在籍し、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数を充足している。

② 現代文化学部子ども発達教育学科においては、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数を充足している。

③ 健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数を充足している。

④ 短期大学部幼児教育科においては、幼稚園教諭二種免許状取得にかかる教職課程認定基準に従って、領域に関する専門的事項について 4 人（うち 1 人が教授)、保育内容の指導法及び教育の基礎的理解に関する科目等について 4 人（うち 2 人が教授）を配置しており、教職課程認定基準の教員数を満たしている。

⑤ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数を充足している。

⑥ 短期大学部美術科においては、教職課程認定基準で定められた必要専任教員数（3 名以上）を充足している。

【長所・特色】

① 現代文化学部言語文化学科においては、教職専門科目担当教員は日本語文化コース・国際コミュニケーションコースに各１名、在籍している。

② 現代文化学部子ども発達教育学科においては、初等教育、幼児教育・保育のそれぞれの専門分野の教員が在籍している。

③ 健康栄養学部管理栄養学科においては、専門教育科目の専門発展分野、栄養教諭養成領域の「学校栄養教育実践論」、「栄養教育実習（事前指導と事後指導を含む。)」において専任教員が科目を担当している。

④ 短期大学部幼児教育科においては、保育内容の指導法に関する科目は、ほぼすべての科目を専任教員が担当している。唯一の例外である「領域環境の指導法」はオムニバスの授業であり、専任教員が最も多くの授業回を担当している。

⑤ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、衣の分野、食の分野、住の分野、生活経営の分野と生活学の根幹の教員が、教職課程の教育の基礎的理解に関する科目を担当している。そのため質の高い学びとなっている。

⑥ 短期大学部美術科においては、教員の専門分野は、偏りがないよう適切に配置されている。

【課題】

① 現代文化学部言語文化学科においては、２年次から各コースに別れるが、学生のほとんどはコースを選んで入学している。１年次から教職をめざしたコースごとの職員配置を検討したい。

② 現代文化学部子ども発達教育学科においては、教職課程認定基準で定められた必要専

任教員数を充足しているものの、開設している授業科目数も多く、専任教員のみで担当できないため、多くの非常勤講師が必要となることが課題である。

③　健康栄養学部管理栄養学科においては、今後は実務経験を有する教員を増員し、更に質の高い学びとするための体制の整備が必要である。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、実務経験を有する教員の増員が課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、教育の基礎的理解に関する科目を担当しているが、担当教員の定年という課題を踏まえ現在の体制を維持できるよう努める必要がある。

⑦ 短期大学部美術科においては、実務経験を有する教員の増員を検討する必要がある。

【資料：3-4-①】

⑵　教員の業績

【現況】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、担当授業科目に関する研究実績はもちろん、学校現場等での実務経験を有している教員が多い。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、担当授業科目に関する研究実績、担当教員の学校現場等での実務経験を有している。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、担当授業科目に関する研究実績、担当教員の学校現場等での実務経験を有している。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教科担当教員は研究業績として研究論文を比治山大学研究論文集に毎年寄稿したり、各学会等にも寄稿している。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、各教員は、担当科目に関する研究実績を有している。また、教育実習の主担当教員は、実務経験を有する教員である。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、担当授業科目に関する研究実績及び担当教員の学校現場等の実務経験を有している。

⑦　短期大学部美術科において、各教員は担当授業科目や分野に関する論文や報告等の研究実績を有しており、また、学校現場での実務経験はないが、スポットとして小中高校や当該世代を対象としたワークショップや講座を数多く手がけている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職専門と教科専門の担当が連携して指導を進めており、本学「教職課程研究」への投稿も継続的に行っている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、担当授業科目に関する研究実績は平成 29 年度教職再課程認定において認定されており、本学「教職課程研究」の投稿も継続的に行っている。また、中・高等学校での実務経験を有している教員を中心に学生の育成に取り組んでいる。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、本学「教職課程研究」等への論文投稿等を積極的に推進し、担当科目に関する業績を積んでいる。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、専門教育科目においては必要専任教員数を充足し、さらに教職専門科目においては、教職指導センターや他学科教員の実務経験を有

する教員ともに学生の育成に取り組んでいる。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、専任教員の研究成果を発表する場として、幼児教育研究会がある。同研究会は、幼児教育科の専任教員と学生で構成され、教員や学生の研究成果を掲載する会誌「和顔愛語」を毎年発行している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、担当授業科目に関する研究実績は平成29年度教職再課程認定において認定されており、担当教員の学校現場等の実務経験は中・高等学校での実務経験を有している教員を中心に学生の育成に取り組んでいる。

⑦　短期大学部美術科においては、担当授業科目に関する研究実績は平成29年度教職再課程認定において認定されている。また、本学「教職課程研究」への投稿も継続的に行われている。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職に関する経験や業績を有している教員が多いことから、教育に関する個々の経験及び知見を交流し、今後の教員養成の充実を図っていきたい。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、担当授業科目に関する研究実績は高いが、実務経験を有している教員の割合は少ない。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、幼稚園教諭と小学校教諭の教員免許状を取得できることが特色であり、幼小連携という観点から、担当教員の専門を超えた共同研究等を実施したい。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教科担当教員は、管理栄養士養成としての実績は十分であるが、今後は本学「教職課程研究」への投稿も視野に入れ、担当科目に関する業績を積むことに努める必要がある。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、幼児教育研究会の活動を促進し、教員の研究活動を活発化させることが課題である。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、担当授業科目に関する研究実績については、本学「教職課程研究」等への投稿が顕著でないという課題がある。

⑧　短期大学部美術科においては、教員によって、教職課程に関する研究活動を活発化させることが課題である。

【資料：3-4-②】

⑶　職員の配置状況

【現況】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教育課程を適切に実施するため、事務組織を設け、過不足なく担当を配置している。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教育課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、教職課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程を適切に実施するため、事務組織を

設け、必要な職員数を配置できている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、幼児教育科の実習指導やカンファレンスルームの実習指導補助を行う学習アドバイザーを配置し、教員の教育活動を支援している。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を適切に実施するため、事務組織を設け、必要な職員数を配置できている。

⑦　短期大学部美術科においては、助手１名を配備している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、全職員で教職指導にあたっており、教職指導センター等の要請にも積極的に取り組んでいる。教員採用試験対策の模擬授業の参観や面接指導にも積極的である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、中学校での実務経験を有している教員と本学教職指導センターが連携し、教職課程を適切に実施している。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、幼児教育・保育に関する事務業務を担当する職員を１名配置し、教育活動の充実を図っている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程を適切に実施するため、学科センター教員と教職指導センター及び教務課事務職員は密に連携をしており、教職課程の指導において同じ視点であたっている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、「幼稚園教育実習事前・事後指導」に関連して、学習アドバイザーを活用した指導を行っている。幼児教育科専用の設備であるカンファレンスルームにおいて、実習に関する相談を随時受け付けている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科に配置している助手は、教員免許状取得者であり、本学科の出身者で、教職課程の専門科目の授業時に具体的に中学校の家庭科の内容や学生に教育実習の事前・事後にフォローしている。

⑦　短期大学部美術科に配置している助手は、美術科の卒業生であることから、美術科の教育課程への理解度が深く、学生たちの学修サポートに活かされている。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、現在のところ配置状況に関する課題は見当たらない。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、現在のところ配置状況に関する課題は見当たらない。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、小学校実習、幼稚園実習、保育所実習、福祉施設実習と実習業務が多く、これらに従事する教員の負担軽減のためにも、一層の事務組織の充実が望まれる。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、学科センター教員が中心となり教職課程を適切に実施しているが、より多くの学科教員を巻き込み、教職指導センターや教務課事務職員との連携をとることが今後の課題である。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、実習に関する業務を担当する職員の配置が課題である。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、中・高等学校での実務経験のある学科センター教員が中心となり、教職課程を適切に実施しており、教職指導センターとも共有を図っており課題は見当たらない。
⑦　短期大学部美術科に配置している助手は教員免許状取得者ではないので、教職課程への充分な学修フォローには至っていない。

【資料：3-4-③】

⑷　FD(Faculty Development)・SD(Staff Development)の実施状況

【現況】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、コース会議等を通じて、授業の内容や方法等についての FD・SD が実施されている。
②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着ける FD・SD が確実に実施されている。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、学内で開催される教職員研修会への参加を通じて、学科の教育の在り方等を協議する機会を設けている。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に付けるための FD・SD が確実に実施されている。
⑤　短期大学部幼児教育科においては、教育研究開発センターが主催する教職員合同研修会に参加し、教育の内容・方法の改善等を図るための研修及び研究を組織的に推進している。
⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着けるための FD・SD が確実に実施さている。
⑦　短期大学部美術科においては、学科の会議等を通じて、授業の内容や方法等についての FD・SD が実施されている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、FD・SD を通して、基礎的な科目の中に教職希望者を集めたクラスを作る等、効果的な教員養成の方法が検討されている。
②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着けるための FD・SD にコース全教職員が参加している。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、上記の教職員研修会以外にも、定例で開催される学会会議において学生の状況を共有し、学生指導に活かしている。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程を担う教職員として望ましい資質能力等を身に付けるための FD・SD が確実に実施されており、学科全教職員が積極的に参加をしている。
⑤　短期大学部幼児教育科において、幼児教育研究会会誌「和顔愛語」は、教員養成に関する資質能力の形成に資するものである。また、学科の会議において、学内外の研修で

得た知識等を随時共有している。
⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着けるための FD・SD に学科全教職員が参加している。
⑦　短期大学部美術科においては、FD・SD 開催に合わせて、適宜、学科内で課題について検討している。

【課題】
①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、上記の研修会や学科会議等を通じて FD・SD の機会は確保されているが、SD の内容を検討する必要がある。
②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着けるための FD・SD にコース全教職員が参加しているが、SD の内容を検討する必要がある。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、上記の研修会や学科会議等を通じて FD・SD の機会は確保されているが、SD の内容を検討する必要がある。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、上記の研修会や学科会議等を通じて FD・SD の機会は確保されているが、SD の内容を検討する必要がある。
⑤　短期大学部幼児教育科においては、スタッフである学習アドバイザーを交えた SD は不十分である。また、本学科単独で行うのは現実的ではないが、実習の実施において連携が求められる学生支援課職員との SD の内容を検討する必要がある。
⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程を担う教職員として望ましい資質・能力等を身に着けるための FD・SD に学科教員全員が参加しているが、SD の内容を検討する必要がる。
⑦　短期大学部美術科においては、上記の研修会や学科会議等を通じて FD・SD の機会は確保されているが、SD の内容を検討する必要がある。

【資料：3-4-④】

⑸　授業評価アンケートの実施状況

【現況】
①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学期終了時にすべての授業科目で授業評価アンケートを実施している。
②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、学期終了時にすべての授業科目で授業評価アンケートを実施している。
③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、各授業の最終回で時間を取り、授業評価アンケートを確実に実施している。
④　健康栄養学部管理栄養学科においては、第 15 回目の授業の授業時間の中で時間を取り確実に実施している。
⑤　短期大学部幼児教育科においては、学期終了時にすべての授業科目で授業評価アンケートを実施している。令和 4 年度前期の回答状況例として卒業必修科目である「教育基礎論」を挙げると、履修した学生から休学したもの 1 名を除く 98 名のうち、回答者は

96 名（98.0%）であった。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、授業評価アンケートを確実に実施しており、教職教科に関する専門科目の授業の履修理由が「資格取得」5 割、受講態度は 7 割以上が「積極的」としており、意欲を持って学んでいる。

⑦　短期大学部美術科では、すべての科目において各セメスターの最終授業で、授業評価アンケートを実施している。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教育実践を見通している点や授業への取組姿勢に関する評価が高く、概ね教職への意識を高める授業が実施されていると考えられる。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、授業への肯定的評価が平均値を超えていることから、おおむね良好な授業を提供できているものと考えられる。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、授業に対する満足度、授業への取組姿勢に対する自己評価の値が高く、おおむね良好な授業を提供できているものと考えられる。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、授業に対する満足度、授業への取組姿勢に対する自己評価の値が大変高く、良好な授業を提供できているものと考えられる。

⑤　短期大学部幼児教育科の回答傾向について、「将来に役立つ内容」が相対的に高くなっている。なりたい職業像に向けて、多くの学生が力量形成できていると感じている点は評価できる。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、1 年次前期の教職教科に関する専門科目の授業は「実習科目」であり、どの科目も 4.4 以上である。それ以降の学期は「講義」が多いためか、授業評価は低いという傾向がある。

⑦　短期大学部美術科においては、授業の履修理由が専門知識修得や卒業要件を抑え、「興味がある」が最も高く、受講態度も「積極的」「やや積極的」で 7 割を超え、主体的に学ぶ姿勢がうかがえる。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学年があがるにつれて解消はされていくものの、授業以外の学習時間が短い学生が散見されることが課題である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、 授業以外の学修時間が十分でない学生もいる。授業以外での学修をいかに促していくかが課題である。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、授業以外の学修時間が 1 時間未満と短い学生が一定数存在している。授業外での学修をいかに促していくかが課題である。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、アンケートの回答率は 100%であるが、履修者数が少ないため統計的な集計ができないことが課題である。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、授業外学修を「していない」との回答が多いことが課題である。いわゆる宿題に取り組む時間をカウントしないなど、授業外学修の概念が一致していない可能性もある。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程に関する科目のうち「講義」科目の「成果への評価」を改善することや、学ぶ楽しさを感じる内容をどう取りいれるかが課題である。

⑦　短期大学部美術科においては、成果としての「学ぶ楽しさ」で「全くそう思わない」が 1 割弱おり、履修理由や授業態度に主体性が見られるのに対し、授業内容の魅力に課題がある。

【資料：3-4-⑤】

5　情報公開

⑴　学校教育法施行規則第 172 条の２、教育職員免許法施行規則第 22 条の６に定められた情報公開の状況

【現況】

学校教育法施行規則第 172 条の２に定める教育研究活動等に関する状況は、本学のホームページで公表し、毎年度実施している自己点検評価書でも公表している。

また、教職課程に関する研究成果は、「比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究（教職課程研究）」として関係機関等に配布している。

教育職員免許法施行規則第 22 条の６に定める教員の養成状況に係る情報も、本学のホームページで公開し、学生情報システム(Hi!way システム)、学生便覧、教職指導センター掲示板等でも公表している。

【長所・特色】

教職課程に限らず、多くの情報をホームページ、学生便覧等で公開している。

【課題】

毎年度、最新情報に更新することは負担が大きいが、今後も積極的に情報発信を続ける必要がある。

【資料：3-5-①②】

⑵　学修成果に関する情報公開の状況

【現況】

卒業者の教員免許取得状況、教職への就職状況も、本学のホームページで公開している。さらに、教職課程履修者で教職に就いた学生の名前と勤務地を、教職指導センターに掲示している。ここ数年は、教職課程履修者の多くが教職に就いている状況であり、在学生にとっては励みになる情報である。

【長所・特色】

本学で教職課程を履修している学生の多くは、小学校教諭一種及び中学校教諭一種（国語・英語）の免許取得希望者である。したがって、近年、教員採用試験の競争率の低下に伴って多くの学生が教職に就ける状況になっている。

【課題】

中学校教諭二種（家庭・美術）及び栄養教諭一種免許取得者の多くが、教職に就けるようにすることが課題である。

【資料：3-5-②】

⑶　教職課程の自己点検・評価に関する情報公開の状況

【現況】

令和３年５月７日付文部科学省からの通知「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について」を受けて、本学の教員養成に関する企画・運営等を所管する教職課程管理運営委員会において、令和４年度から教職課程自己点検評価を実施すること、

実施主体は教職指導センター会議が主管することを決定した。

【長所・特色】

教職指導センターが中心となって、自己点検・評価を実施している。

【課題】

実施初年度であることから、教職課程に係る全ての関係部署が主体的に自己点検を実施することができるように共通理解を深める工夫が必要である。

【資料：3-5-③】

6　教職指導

⑴　教職課程を履修する学生の確保に向けた取組状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、年 2 回のオリエンテーション時に、職業選択の立場から見た教職の位置づけや国語科教育法の授業内容について説明を行っている。また、学科全体の教職オリエンテーションでは模擬授業を披露している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、年 2 回の教職オリエンテーションを行い、キャリア形成の視点から教職選択の利点について説明している。また、新入生対象の教職オリエンテーションで教職履修学生が模擬授業を行い、教職を履修する魅力を発信している。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、学科の特性上、入学者は、小学校教員、幼稚園教員、保育士を目指す学生がほとんどであり、意図的に教職課程を履修する学生確保の取り組みをする必要はない。一方で、途中で教員免許状の取得をあきらめる学生は一定数存在する。そのような学生には、チューター教員を中心に、場合によっては保護者を交えつつ丁寧な面談を行い、再度、教員免許状取得にチャレンジできるよう支援している。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程の履修を適切に行うために「学びのガイドブック」を作成し教職課程の履修を希望する学生を支援している。また、毎年度学期初めに教職指導センター主催の教職課程オリエンテーションに多くの学生が参加するように促している。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、教職課程に関する研究成果を、「教職課程研究」としてまとめ、関係機関等に配付している。

また、教育職員免許法施行規則第 22 条の 6 に定める教員の養成状況に係る情報を、本学のホームページで公開し、学生情報システム(Hi!way システム)、学生便覧、教職指導センター掲示板等でも公表している。

学生受け入れについては、アドミッション・ポリシーに従って適切に入学者選抜を行っている。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職希望者に随時、教職に就いている卒業生の情報を周知している。さらに毎年度教育実習を経験した 2 年次生が 1 年次生に「教育実習報告会」を開き、上下の関係を深めながら連帯感を高めるようにしている。また、教職課程を継続して履修することに不安を抱えた学生には、面談を繰り返し行い支援している。

⑦ 短期大学部美術科においては、教職課程に関する情報は適宜提供を行っている。また、入学時の学科オリエンテーションにおいて、教員免許状取得に必要な情報を提示した上で教職コース申込者を受け入れている。

（教職オリエンテーションの様子）

【長所・特色】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、学科全体の教職オリエンテーションで、4 年次の教職課程履修者の代表が模擬授業を披露する。披露にあたっては学年を越えて協力し合い、励まし合いながら教職をめざす関係づくりがなされる。先輩の姿を見て次年度の模擬授業を志願する学生が多い。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、入学時の教職オリエンテーションや学科オリエンテーションで教職の魅力を発信し、教職課程を履修する学生の確保に取り組んでいる。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、途中で教員免許状の取得をあきらめる学生が一定数存在する。そのような学生には、チューター教員を中心に、場合によっては保護者を交えつつ丁寧な面談を行い、再度、教員免許状取得にチャレンジできるよう支援している。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、１，２年生はチューター教員が、３，４年生はゼミ担当教員が、学科センター教員と連携して個々の学生の教職課程を含めた履修指導及び学修支援を行っている。また、１年前期からのみならず希望があればどのセメスターからでも教職課程の履修が可能であることを１，２年の各オリエンテーションで説明している。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、幼児教育研究会会誌「和顔愛語」を実習先施設等関係機関に送付し、教員養成に関する情報を提供している。また、学生の受け入れについて、幼児教育科独自の総合型選抜（プレゼンテーション型）を実施し、多様な学生を受け入れる工夫をしている。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職課程オリエンテーション及び前期オリエンテーションの履修時に教職課程を希望した学生と面談し、教職課程を履修する学生の確保に向けて取り組んでいる。

⑦ 短期大学部美術科においては、中学校の美術教員の免許状ではあるが、教育業界への就職や絵画教室の起業など、教育に関する進路を希望している学生にも門戸を開いている。

【課題】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教職オリエンテーションに２年次以降の教職課程履修者を参加させることにより、模擬授業への意識と学年を超えた教職志望の連帯感を高めることをめざしたい。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、入学時の教職オリエンテーションや学科オリエンテーションで教職の魅力を発信しているが、入学時のオリエンテーションで説明する内容が多く、十分な説明には至っていない。
③ 現代文化学部子ども発達教育学科において、本学科の学生は、入学時点では、ほとんどの学生が教員免許状の取得を希望しているが、近年、比較的早い段階（大学 2 年次前期など）で取得をやめる学生が存在する。そのような学生に教職の魅力を伝え、教員免許状取得の学修を継続させていくことが課題である。
④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程の履修は開放制であり、管理栄養士国家試験受験資格の取得を第一目標にしているため、途中で断念する学生が毎年一定数いる。
⑤ 短期大学部幼児教育科においては、より広い範囲に情報を提供することとその方法が課題である。
⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、1 年次後半より卒業研究配属（ゼミ）の際に卒業研究配属を決定する。教職課程の学生は学科の教職指導センタ―委員が担当する卒業研究配属（ゼミ）の配属しているため意欲にある程度は保てる。引き続きの体制維持が課題である。
⑦ 短期大学部美術科においては、入学当初のオリエンテーションの中で教職課程についての説明会を実施しているが、時間が制限されており、十分な説明には至っていない。

【資料：3-6-①】

⑵ 学生に対する履修指導の実施状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、国語科教育法等で「履修カルテ」を活用し、学期のはじめに資格取得に必要な単位の履修状況のチェックをしている。また、教職に就く経路については、各教育委員会が実施する教員採用試験を目指す他に、臨時採用や私立学校への採用も視野に入れることも勧めており、国語科教育法は授業実践に直結する指導を進める旨を明らかにしている。
② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、前期・後期のオリエンテーション時に該当セメスターで取得すべき科目を提示し、時間割表で確認するとともに、チューター教員が履修状況を確認し、指導を行っている。
③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、各セメスターのオリエンテーション時に、履修が必要な科目を提示する。また、チューター教員は、担当学生の履修状況を確認し、履修ミス等の発生を未然に防止するよう努めている。
④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、前期・後期のオリエンテーションの際に学生には時間割表中に教職課程の履修を明示して、履修登録をするよう指導している。また、履修登録が確実にできているか学科センター教員が履修登録の締め切りまでに確認している。
⑤ 短期大学部幼児教育科においては、入学前教育プログラム、新入生オリエンテーションにおいて、免許資格を取得する意識を高める指導を行っている。さらに、1 年次後期

から始まる「幼稚園教育実習事前・事後指導」において、「保育・教育実習スタンダード」を用いて学生自身の課題と向き合う指導を行っている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、前期・後期のオリエンテーション時に学生に時間割表中に教職課程の履修を明示し、正しく履修登録ができるように指導を実施している。

⑦　短期大学部美術科においては、履修にあたり、その先の将来ビジョンを明確にすることで学修意欲を喚起させている。また、「履修カルテ」や学科独自に作成した履修ガイドや教育課程表を活用しながら、履修指導を行っている。

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、国語科教育法で実践的な指導を進める旨を明らかにし、授業体験を中心に据えて指導を進めている。体験した授業をふりかえり、国語科教育の理論や歴史の中に位置づけることによって、個々の実践力の基礎を作ることを狙いとしている。総じて熱心な取り組みが見られ、模擬授業にあっても独自の工夫をしようとする者が多々見受けられる。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、前期・後期のオリエンテーション時に該当セメスターで取得すべき科目を提示し、時間割表で確認するとともに、チューター教員が履修状況を確認し、指導を行うことで、必要な科目を履修することができている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、先述のとおり、セメスター毎にチューター教員が担当学生の履修状況を確認し、適切な指導助言が可能な体制を取っている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、１，２年生はチューター教員と学科センター教員、３，４年生はゼミ担当教員と学科センター教員が、セメスターごとに少なくとも1回以上は教職課程の履修継続について、見直しが必要かどうかの面談を実施している。また、学科の教員間でも教職課程履修中の学生については情報を共有し学修等の支援を行っている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、令和4年度入学予定者を対象とした入学前教育プログラムにおいて、「音楽の課題」と「読みの課題（保育者に関する入門書)」を課すなどして、保育専門職に就くことの意識付けを行っている。また、新入生オリエンテーションにおいて、教育実習等のスケジュールを伝え、前期授業科目学習の意欲を喚起している。

さらに、1年次後期からの教育実習の事前指導と事後指導において、付属幼稚園教員との連携によって、参加意欲を高めている。教育実習等の実施について、学生の不安などについて、教員が相談に応じることはもちろん、学習アドバイザーも窓口になり、不安の解消に努めている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、初年次セミナー時に「防災の紙食器作り」の同級生へのデモンストレーションを担当し、自信を持たせることを通して教職課程を履修する学生の意識向上を図っている。

⑦　短期大学部美術科においては、教職指導担当者だけでなく、履修者の学年チューター教員とも連携を取りながら、履修登録の取りこぼしがないかダブルチェックを行ったり、

授業期間中は適宜、単位修得に向けての指導をしたりしている。

【課題】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、国語科の授業づくりについての関心は高まっているが、基盤となる専門領域の学習が今ひとつという学生が少なくない。授業づくりに役立つレベルの専門的学力の充実が課題である。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、履修指導を毎学期の開始時に丁寧に行うことにより、履修登録は確実に行っているが、単位取得に至らない学生もいる。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、履修指導の際、教職に関わる選択科目も積極的に履修し、自身の専門性を高めるよう指導しているが、必要最低限の単位数で済まそうとする学生が散見されることが課題である。

④ 健康栄養学部管理栄養学科においては、学生に対する面接指導や相談は適切に実施しているが、面談実施の際に学科教員間に多少の温度差があり、連携をとることが今後の課題である。

⑤ 短期大学部幼児教育科においては、実習担当教員の事務的負担を軽減し、より充実した実習指導を行うことが課題である。

⑥ 短期大学部総合生活デザイン学科においては、様々な場面を捉えて教職課程を履修する学生の確保を図っているが、なかなか教職課程に挑戦する学生数が増えない。

⑦ 短期大学部美術科においては、履修指導の資料に重複した内容も多く、資料の目的に合わせた内容の精査が必要である。

【資料：3-6-②】

⑶ 学生に対する進路指導の実施状況

【現況】

① 現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、2 年次後期開講の国語科教育法Ⅰの開始時に、就職に向けての活動計画を簡単に展望して教職希望の転換点を 3 年次後期であることを伝え、自身の希望と特性を見極めるよう促している。教職への意志を固めるとともに、教育実習の時期を勘案すると、教職以外の就職も考えに入れている場合は早めに就職先を選定することが望ましいと考えるからである。学生の志望状況についてはチューターに連絡し、適切な指導が受けられるよう配慮している。

② 現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教職への就職に関する情報を適切に提供するなど、学生のニーズに応じたキャリア支援体制が適切に構築されている。

③ 現代文化学部子ども発達教育学科においては、セメスター毎に進路希望調査を実施し、学生の希望進路の把握に努めている。また、セメスター毎にチューター教員・ゼミ教員による面談を実施し、学生の進路希望の状況を把握するとともに、進路に関する相談を受ける。必要があれば保護者も交えた進路相談を実施する。また、「履修カルテ」を通じて、セメスター毎の成績の状況や教員免許状取得に向けた課題の所在を、チュー

ター教員・ゼミ教員と学生間で共有しており、チューター教員・ゼミ教員は、個々の学生の状況に応じた適切な助言ができるようになっている。

教員採用試験対策としては、共通教育科目の「キャリアデザイン演習」等の授業、学外業者による講座、本学教職指導センター主催の講座がある。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程履修者の進路状況を随時在学生に適切に提供し、学生が教職に就けるよう支援している。また、個々の学生に早期の活動への動機づけを行うことを目的として、各セメスターで面談を実施し、希望進路等の確認を行っている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、キャリアセンター委員を中心として、入学時から卒業後の進路についてイメージできるような働き掛けをしている。新入生オリエンテーションを始め各期のオリエンテーションで必ずキャリアに関する説明をしている。また、1 年次及び 2 年次の学生には Google Classroom を通じて、就職説明会などの情報を随時アップしている。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教職への就職に関する情報を適切に提供するなど、学生のニーズに応じたキャリア支援体制が適切に構築さている。

⑦　短期大学部美術科においては、教職希望者へのキャリア情報の提供はもちろん、キャリア担当やコース担当の教員から、個々に合わせて進路サポートも行っている。

教員採用試験に向けて【試験前集会】

【長所・特色】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、3 年次後期を教職希望の転換点と捉えて進路決定の機会を設け、就職活動や教員採用試験に向けての意志を固めることができた。併せて、他の学生の就職活動の状況について教員間の共通理解を図る機会ともなっている。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、教員採用試験合格者や臨時的任用教員、私学常勤教員の職につく学生が増加傾向にある。学生のニーズを把握し、中・高等学校だけでなく、私立学校の募集の情報提供を行っている。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、教員採用試験の合格に向けて、各ゼミ等を中心に、学生同士の相互の学び合いを重視している。そのため、学科教員は教員採用試験を受験する学生同士のネットワーク形成を促すような指導を心がけている。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、教職課程履修者同士で学年をまたいだ繋がり

を重視している。具体的には交流や意見交換ができる場の設定を学科センター教員は積極的にコーディネートし、在学生間で教職に就くことの意識を高めあうよう努めている。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、保育職への就職について、Google Classroom を通じて随時情報を発信している。また、日常的なキャリア支援として、チューター教員が就職活動状況を把握するようにしている。教員採用試験を含む公務員試験受験を希望する学生の名簿を作成し、一次試験対策を行うとともに、二次以降の面接や実技試験に向けての模擬面接や模擬グループワークなどに取り組んでいる。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、ここ数年、新卒で教員採用試験に合格する先輩や非常勤講師や臨時講師を経て専任になる者がおり、教員というキャリア選択をする学生が出てきた。また、今年度は教職課程の学生の全員が現場の家庭科教員となることができた。

⑦　短期大学部美術科においては、学生の進路状況を Google スプレッドシートで共有しており、学科教員はいつでも学生の最新の現況を知ることができる。また、月 1 回の学科会議でも個々の学生状況を共有し、必要に応じて連携・サポートを行っている。

【課題】

①　現代文化学部言語文化学科日本語文化コースにおいては、教員採用試験不合格後に進路に悩む姿が散見される。事前に臨時採用教員等の進路があることは示しているが、本採用を求める保護者も多く、臨時採用後の状況等について具体例を挙げての説明が必要である。

②　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコースにおいては、学生のニーズを把握し、中・高等学校・私立学校だけでなく、特別支援学校等、教職を希望する学生が教職に就職することができるよう情報提供する必要がある。

③　現代文化学部子ども発達教育学科においては、コロナ禍において学校現場でのボランティア等の活動が激減したことを受け、教職を希望する学生の学校での経験が不足している。そのため、教職に就くことを逡巡する学生も散見される。そういった学生に、いかに教職へ就く意思を強く持たせることができるかが課題である。

④　健康栄養学部管理栄養学科においては、管理栄養士指導センター主導の管理栄養士国家試験対策講座との連携が不可欠である。管理栄養士国家試験受験資格の取得と教職に就く目標を達成できるよう計画段階で連携を取りながら進めることが課題である。

⑤　短期大学部幼児教育科においては、不断の情報収集と、より正確な情報発信が課題である。また、卒業後のフォローアップ、中途退職者の再就職支援も課題である。

⑥　短期大学部総合生活デザイン学科においては、教員というキャリア選択をする学生に対しては、保護者の理解（非常講師等を経験してからの採用試験合格を目指す）も必要である。

⑦　短期大学部美術科においては、教職課程コース申込時に教員採用試験を受験するかどうか悩んでいた学生の多くは、最終的に受験しない場合が多い。

【資料：3-6-②】

7　関係機関との連携

⑴　各教育委員会や各学校法人との連携・交流等の状況

【現況】

教育委員会と本学は連携事業として、教育実習・介護等体験実習と学校支援ボランティアを実施し、優れた実践的指導力を身に付けた質の高い教員の養成・育成を目指している。

教育実習と介護等体験実習は、近隣大学で組織している広島地区大学教育実習研究連絡協議会において、広島県教育委員会や市町教育委員会、受け入れ学校と連携を図りながら、毎年、教育実習などの成果や課題を共有し、教職課程を履修している学生の一層の質の向上を図る取り組みを進めている。

学校支援ボランティアは、市町教育委員会、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校と大学間で密に連携を図っており、毎年、受け入れ学校は約 40 校、参加する学生は約 60 名となっている。

さらに平成 29 年度からは、広島市教育委員会の主催「ひろしま未来教師セミナー」が始まり、２・３年の学生が約 30 名参加している。

【長所・特色】

各教育委員会及び各学校法人と、教職指導に関する連携・交流の窓口は教職指導センターが担っている。教職指導センターに、広島県・広島市教育委員会で勤務経験がある教職員を配置していることから、教育委員会等との連携はスムーズである。

【課題】

教職希望の学生が教員採用試験を受ける都道府県・政令指定都市の範囲は、北海道から九州まで広範囲に渡っている。そのため多くの情報を入手し整理するとともに、学生のニーズに応じた的確な指導を行う必要がある。

【資料：3-7-①】

⑵　教育実習等を実施する学校との連携・協力の状況

【現況】

前述したとおり、教育実習と介護等体験実習は、近隣大学で組織している広島地区大学教育実習研究連絡協議会において、広島県教育委員会や市町教育委員会、受け入れ学校と連携を図りながら、毎年、教育実習などの成果や課題を共有し、教職課程を履修している学生の一層の質の向上を図る取り組みを進めている。

【長所・特色】

前述の協議会を通して各教育委員会、受け入れ学校と連携を推進していることから、スムーズに連携・協力ができている。

【課題】

県外から本学へ進学してきた学生の教育実習は、当該学生の出身校で実施することになっているので、本学の教職員の継続的指導が難しい。

【資料：3-7-①】

⑶　学外の多様な人材の活用状況

【現況】

教職課程の「生徒指導の理論及び方法」に係る授業科目には、広島市教育センターにおいて生徒指導を担当していた元校長を招聘している。さらに、「日本語リテラシー」においても元校長を招聘している。

さらに、「採用試験直前対策講座」、面接試験に向けての「話し方講座」、「苦手科目対策講座」等にも学外の講師を多数招聘している。

また、広島市教育委員会主催「ひろしま未来教師セミナー」では、教育委員会の職員から指導を受けている。

【長所・特色】

本学は、広島市教育委員会の施設である広島市教育センターが近くにあること、また広島県・広島市教育委員会で勤務経験のあるスタッフが、教職課程を担当していることもあり、多くの学外の人材を活用することが出来ている。

【課題】

特別支援教育の視点に立った支援や合理的配慮の在り方など、学校現場のニーズを的確に把握し、その領域の専門的な人材確保を一層図る必要がある。

【資料：3-7-②】

Ⅳ　学部ごとの総合評価

1　現代文化学部

言語文化学科日本語文化コースでは、キャリア形成の視点から教職に就くことの意義を啓発し、資質・能力の向上をめざした取り組みを進めてきている。具体的には、年度当初に独自の教職オリエンテーションを行うなどして、より多くの教職希望者を募るとともに、国語科教育法では評価方法を明確にして具体的な努力目標を明らかにし、基礎学力の向上を図ってきた。本コースの教員免許取得者数の目標は所属学生の 15%であるが、令和 4 年度以降は目標を達成しており、一定の成果を認めることができる。

言語文化学科国際コミュニケーションコースは、「Ⅲ領域ごとの自己点検評価」で記したように、教員養成課程として求められている設備と人員を備え、適切な課程運営を行っている。各教員の専門性を鑑みながら相互の理解と連携を図っていくことなどにより、養成教育の改善に努めている。

子ども発達教育学科は、その開設当初より、「明日の社会」を担う子どもが未来に「夢」をもち、健やかに成長発達することのできる「子育て・次世代育成支援社会」を実現するために、確かな専門性と豊かな実践力を有する小学校教諭・幼稚園教諭・保育士を育成することを目標としている。現在、在籍学生のほとんどが教職課程を履修し、卒業生の 7〜8 割が初等教育・就学前教育に携わる状況であり、子ども発達教育学科の使命を果たしていると評価している。このような成果は、適切な教員配置、カリキュラム及び個々の授業の継続的な改善等によるものと考えられる。

一方で、教職課程を巡る状況は急激に変化している。今後は、様々な社会変化に対応しつつ、より一層、質の高い教員を養成していくよう、さらなる努力が求められている。

2　健康栄養学部

管理栄養学科では、学生数の 10%程度の教員免許取得を目標としているものの、教職課程の履修は開放制であり履修者が少ないことが課題である。しかし、この履修者が少ないことを長所ととらえ、履修学生に対してはきめ細い指導を行うことができている。履修学生は、真摯に学修に取り組む姿勢があり、教員免許取得に対してのモチベーションも高く、教員採用候補者選考試験を受験する学生は毎年確実におり、栄養教諭の競争率が高い中で難関を突破する学生もでている。管理栄養学科の学生は栄養士免許証取得や管理栄養士国家試験受験資格取得のための導入分野、専門基礎分野、専門分野と重ね合わせながら計画的に履修をしているので授業科目は多い。今後も教職課程の履修を希望している学生がモチベーションを維持しつつ充実した学びを進めることができるよう、学科センター教員のみならず学科の教員が一丸となり学生への支援を継続的に行っていきたい。

3　短期大学部

幼児教育科は、「Ⅲ領域ごとの自己点検評価」で記したように、教員養成課程として求められている設備と人員を備え、適切な課程運営を行っている。各教員の専門性を鑑みながら相互の理解と連携を図っていくこと、経験豊かな人材を登用することによって学生の意欲を

高めることなどにより、養成教育の改善に努める。

総合生活デザイン学科では、中学校家庭科で指導する内容は、各教員の専門性に基づき、教職専門科目においてしっかりと指導がなされている。教職課程履修者は、教員採用試験を受験することを目標にしているが、名簿登載されるように対策講座の開設等の充実を図り、学生の意欲を高めることが課題である。

美術科は、中学校教諭二種免許状美術の教員養成課程として、設備や人員、指導等において適切な運営を行なっている。近年は、入学時のガイダンスにおいて詳細な資料をもとに教職課程について細やかな説明を行い、教職課程履修への自覚や 2 年間の学びの見通し等への理解を深めることで、真に教職を志望する学生や教育業界に携わりたい学生を確保できている。

今後も教職指導の充実はもちろん、教員採用試験の受験者増に向けて、引き続きブラッシュアップを図っていきたい。

Ⅴ　自己評価報告書作成プロセス

⑴　教職課程自己点検評価の実施の決定

令和３年５月７日付文部科学省からの通知「教育職員免許法施行規則等の一部を改正する省令の施行等について」を受けて、本学の教職に関する企画・運営等を所管する教職課程管理運営委員会において、令和４年度から教職課程自己点検評価を実施すること、実施主体は教職指導センター会議が主管することを決定した。

⑵　教職指導センターによる法的由来事項の点検と各学部学科教職課程へのデータ等の扱いの確認

令和４年度初めに、学校教育法第 109 条第１項、学校教育法施行規則第 172 条の２、教育職員免許法施行規則第 22 条の６に定められた情報は、本学のホームページに公開されていることを確認した。

⑶　教職指導センター会議における教職課程自己点検評価の進め方の協議

令和４年５月に開催した教職指導センター会議で、教職指導センターが作成した「教職課程自己点検評価報告書の作成に当たって（案)」を示し、６月には「令和４年度教職課程自己点検評価報告書（案)」を協議し、案どおりに自己点検を進めることを確認した。

⑷　教職課程自己点検評価の実施

令和４年６月の教職指導センター会議で協議した評価報告書（案）の項目に従い、各学部学科等で評価報告書（案）を作成し、９月末までに教職指導センターに提出した。

⑸　教職課程自己点検評価報告書の作成と協議

９月末までに提出された自己点検評価を教職指導センターで集約して編集した内容を、12月末の教職指導センター会議で協議して確認・了承された。

⑹　教職課程管理運営委員会による確定とホームページでの公開

令和５年２月、教職指導センター会議で確認・了承された教職課程自己点検評価報告書を教職課程管理運営委員会に報告し学長の決裁を経た後、公開した。

⑺　令和５年度自己点検評価について

令和４年度実施の自己点検評価を基に更新を行った。

⑻　令和６年度自己点検評価について

令和５年度実施の自己点検評価を基に更新を行った。

Ⅵ　基礎データ（令和６年５月１日現在）

※就職者数は前年度の確定が５月１日となる。従って前年度のまとめを掲載している。

⑴　現代文化学部言語文化学科日本語文化コース（中一国語・高一国語）

①　前年度卒業者数	69 人
②　①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	52 人
③　①のうち教員免許取得者数	14 人
④　②のうち教職に就いた人数	4 人
⑤　④のうち正規採用者数	3 人
⑥　④のうち臨時的任用者等の数	1 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	9 人	3 人	5 人	1 人	45 人
相談員・支援員など専門職員数	0 人				

＊言語文化学科全体の人数を示している。

⑵　現代文化学部言語文化学科国際コミュニケーションコース（中一英語・高一英語）

①　前年度卒業者数	67 人
②　①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	50 人
③　①のうち教員免許取得者数	11 人
④　②のうち教職に就いた人数	1 人
⑤　④のうち正規採用者数	0 人
⑥　④のうち臨時的任用者等の数	1 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	9 人	5 人	2 人	2 人	46 人
相談員・支援員など専門職員数	0 人				

＊言語文化学科全体の人数を示している。

⑶　現代文化学部子ども発達教育学科（幼一・小一）

①　前年度卒業者数	61 人
②　①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	60 人
③　①のうち教員免許取得者数	59 人
④　②のうち教職に就いた人数	32 人
⑤　④のうち正規採用者数	26 人
⑥　④のうち臨時的任用者等の数	6 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	7 人	6 人	1 人	0 人	30 人
相談員・支援員など専門職員数		0 人			

⑷ 健康栄養学部管理栄養学科（栄養一）

① 前年度卒業者数	28 人
② ①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	27 人
③ ①のうち教員免許取得者数	2 人
④ ②のうち教職に就いた人数	2 人
⑤ ④のうち正規採用者数	0 人
⑥ ④のうち臨時的任用者等の数	2 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	7 人	2 人	1 人	0 人	28 人
相談員・支援員など専門職員数		2 人			

⑸ 短期大学部幼児教育科（幼二）

① 前年度卒業者数	67 人
② ①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	57 人
③ ①のうち教員免許取得者数	65 人
④ ②のうち教職に就いた人数	15 人
⑤ ④のうち正規採用者数	15 人
⑥ ④のうち臨時的任用者等の数	0 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	3 人	2 人	4 人	0 人	23 人
相談員・支援員など専門職員数		1 人			

⑹ 短期大学部総合生活デザイン学科（中二家庭）

① 前年度卒業者数	60 人
② ①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	50 人
③ ①のうち教員免許取得者数	3 人
④ ②のうち教職に就いた人数	3 人
⑤ ④のうち正規採用者数	1 人
⑥ ④のうち臨時的任用者等の数	2 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	4 人	0 人	2 人	0 人	47 人
相談員・支援員など専門職員数			0 人		

⑺ 短期大学部美術科（中二美術）

① 前年度卒業者数	79 人
② ①のうち就職者数（企業・公務員を含む）	34 人
③ ①のうち教員免許取得者数	4 人
④ ②のうち教職に就いた人数	1 人
⑤ ④のうち正規採用者数	0 人
⑥ ④のうち臨時的任用者等の数	1 人

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	3 人	3 人	1 人	1 人	10 人
相談員・支援員など専門職員数			1 人		

⑻ 教職指導センター

	教授	准教授	講師	助教	その他
教員数	2 人	0 人	2 人	0 人	1 人
相談員・支援員など専門職員数			0 人		

Ⅶ　資料編

1　教育理念・教員養成の目標

3-1-①：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」⇒「教員養成の目標及び計画」

＜項　目＞

「教員養成の目標及び計画」「教員養成に係る組織」「教員の数」「各教員の学位及び業績並びに担当授業科目」「教員養成に係る授業科目」「授業の方法及び内容並びに授業計画」「卒業者の教員免許取得、教員への就職状況」「教員養成に係る教育の質の向上を目指す取り組み」

3-1-②：比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第 6 巻「教職指導センターの機能とその充実に向けて」

3-1-③：「学びのガイドブック」教職指導センター

3-1-④：「令和 6 年度教職事業計画」教職指導センター会議

3-1-⑤：「'24 入学者選抜要項」入試広報課

2　教育課程の編成状況

3-2-①：「2024 学生便覧」比治山大学・比治山大学大学院、比治山大学短期大学部

3-2-②：「6 号館 06114 教室」本評価書の P9（写真）

3-2-③：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」⇒「５教育課程や授業に関する情報」⇒「授業計画の概要（シラバス)」

＜項　目＞

「建学の精神・理念、目的」「沿革」「組織図」「学長メッセージ」「三つの方針」「ミッション・ビジョン、特色」「比治山大学・比治山大学短期大学部教職員倫理綱領」「各種ポリシー」「ブランドブック」「大学歌」「教育研究情報等の公表」「機関リポジトリ」「財務情報の公開」「大学教育改革」「設置認可・届出申請書」「履行状況報告書」「高等教育の就学支援新制度・機関要件確認申請書」「認証評価結果」「相互評価」「自己点検・評価」「各種アンケート結果」「FD 活動」「SD 活動」「教員研究ガイド」他

3-2-④：令和 6 年度教職指導センター事業実績報告

3　学習成果の把握・可視化

3-3-①：「2024 学生便覧」比治山大学・比治山大学短期大学部・比治山大学大学院

3-3-②：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」⇒「６学習の成果に係る評価及び卒業・修了の認定に当たっての基準に関する情報」⇒「成績の評価」

3-3-③：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」⇒「６学習の成果に係る評価及び卒業・修了の認定に当たっての基準に関する情報」⇒「単位取得状況」

3-3-④：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」⇒「教員養成の目標及び計画」

3-3-⑤：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サ

ポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」⇒「卒業者の教員免許取得、教員への就職状況」

3-3-⑥：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」⇒「６学習の成果に係る評価及び卒業・修了の認定に当たっての基準に関する情報」⇒「成績の評価」

4　教職員組織

3-4-①：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」⇒「３教員組織、教員の数並びに各教員固有の情報」⇒大学「教員組織」、短期大学部「教員組織」

3-4-②：本学ホームページ「情報公開」⇒「機関リポジトリ」

3-4-③：本学ホームページ「情報公開」⇒「自己点検・評価」⇒「令和３年度認証評価」⇒「基準４　教員・職員」

3-4-④：本学ホームページ「情報公開」⇒「FD 活動」「SD 活動」

3-4-⑤：本学ホームページ「情報公開」⇒「各種アンケート結果」⇒「学生による授業に関するアンケート調査結果」

5　情報公開

3-5-①：本学ホームページ「情報公開」⇒「教育研究情報等の公表」

3-5-②：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」⇒「卒業者の教員免許取得、教員への就職状況」

3-5-③：「令和４年度教職課程自己点検評価報告書」比治山大学・比治山大学短期大学部

6　教職指導

3-6-①：比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第６巻「教職指導センターの機能とその充実に向けて」

3-6-②：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」

7　関係機関との連携

3-7-①：本学ホームページ「比治山の学生サポート力(HIJI SUPPORT)」⇒「進路・就職サポートを見る」⇒「進路・就職支援へ」⇒「教員の養成に係る教育の質の向上をめざす取り組み」

3-7-②：比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究第６巻「教職指導センターの機能とその充実に向けて」